

② 南アメリカの国々

日本の裏側

東京の対蹠点^(*)はブエノスアイレスの東方沖である。従って、東京とブエノスアイレスでは、時差が 12 時間、季節は正反対になる。

私たちは新聞、テレビなどで毎日地図を見て生活している。最も優れた地図は地球を小さく縮めた球体の地図、地球儀であるが、日常生活で目にするのは平面の紙上に表したものである。地球の表面すなわち曲面を平面に表すことは不可能であるから、地図は距離や方位（方角）、面積など、どこかに歪みが出てくる。そのため面積が正しい地図、方位が正しい地図など、目的に合った地図を選択する必要がある。

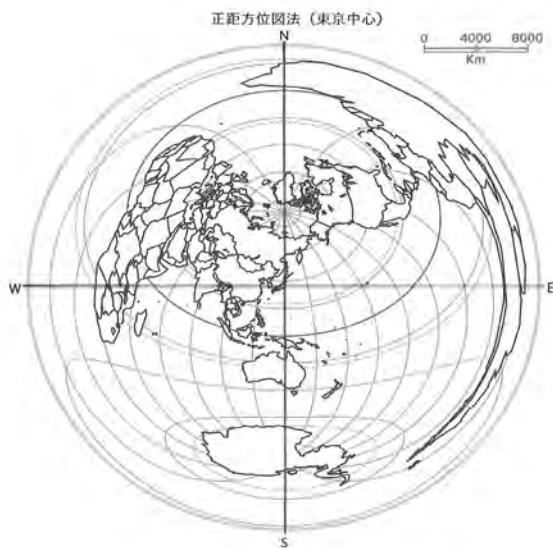
(*) 対蹠点 地球上のある地点から見て、地球の中心を通過して反対側にある地点（地球の裏側の地点）

例：北極⇄南極

求め方：緯度は北緯と南緯を逆にする。経度は 180 度ずらす

例：鶴岡の位置 北緯 38 度 43 分 37 秒 東経 139 度 49 分 35 秒

→ 南緯 38 度 43 分 37 秒 西経 40 度 10 分 25 秒



左の地図は、正距方位図法による東京中心の地図である。地図の中心から目的地までの距離と方位が正しく表されている。また、中心から外側に行くほど面積と形にひずみが大きくなる。

これによると

ニューヨークは日本の北北東

オーストラリアは南

インドは西

イギリスは北北西

グリーンランドは北

であることが解ります。

(PC から地図引用し、東西南北線を記入)

豊かな自然

南アメリカ大陸の太平洋側は、海拔高度が高いひとつながりの山脈である。新期造山帯^(*1)に属するアンデス山脈で、ベネズエラから大陸南端のフェゴ島まで続く。その長さは 10,000 km にも及び、幅の最も広いところは 600 km を越え、7 カ国に跨っている。

アンデス山中の高度 3,500m～4,500m に、幅 150～250 km のアルティプラノ^(*2)といわれる高原地帯が広がり、インカ帝国の舞台となった。また、そこには琵琶湖の 12 倍、湖面の標高が富士山頂とほぼ同じのチチカカ湖があり、湖岸は豊かな農業地帯になっている。

南アメリカ大陸は、北緯 20 度から南緯 50 度の間に位置している。気候区分は熱帯気候 63.4%、温帯気候 22.0%、乾燥気候の丈の短い草が生育するステップ 6.7%、沙漠 7.3% の 14% を占めている。なかでもアマゾン盆地はほとんどが熱帯雨林気候で熱帯雨林、セルバが広がっており、日本の約 16 倍もの広さである。

ギアナ高地とブラジル高原は、サバナ気候で低木を交えた草原が広がっている。乾季の日中は猛烈に暑くなるが、海拔高度の高いところ、例えばボリビアのラパス、エクアドルのキトは爽やかな常春でしのぎやすい。このような冷涼な気候のもとでジャガイモ、トウモロコシやサツマイモなどがインディヘナ^(*3)、先住民族によって作物に変えられてきた。

中南米は様々な作物が栽培され、北半球との季節の違いを生かして多くの農産物が世界に輸出されている。太陽と水に恵まれているため森林資源は総面積に対する森林面積の比率は50%に達し、世界の森林面積の20%を占めている。

豊富な水資源も開発され始めている。ラプラタ川支流の1つ、パラナ川に1974年から巨大なダムがブラジルとパラグアイの共同出資で建設され、1984年にはイタイプ発電所が送電を開始した。その最大出力は1,260万kWで世界1である。

包蔵水力最大の河川は、いうまでもなくアマゾン川であり、この水系にもダム建設が始まっている。アマゾン川流域には既に150のダムがあり、今後、何百という工事が計画されていると聞く。ダム建設に伴う弊害、動植物の多様性が損なわれることであり、先住民族の立ち退きなどの問題が起きている。

南アメリカの地下資源探査が遅れているが、将来はかなり期待されている。ベネズエラのオリノコ川流域には、オリノコタールと呼ばれるオイルサンドが埋蔵されており、その量は世界全体の石油埋蔵量を上まわるのではともいわれている。また、ブラジル高原北縁のカラジャスで鉄鉱石が発見され、埋蔵量は世界最大であるだけでなく、鉄分の含有量が66%もある富鉄である。1985年から採掘が行われ、日本にも輸出されている。ブラジルは鉄鉱石輸出量がオーストラリアに次いで2位で、全輸出量の21.2%を占めている。



(*1) 新期造山帯 約2億4700万年前から約6,500万年前の中生代から新生代以降の造山運動で基盤岩が形成された場所。地震や火山帯と一致し、大褶曲山脈や弧状列島をなしている。アルプスヒマラヤ造山帯と環太平洋造山帯に二分される

(*2) アルティプラノ スペイン語で「高原」の意味。ペルー南部からボリビアを通してアルゼンチン北部に広がる高原地帯。風が強く樹木は育たないが、ネズミの仲間チンチラ、ラクダ科のビクーニャ、アルパカ、リヤマ、グアナゴが生息し、フラミンゴの大群も姿を見せる。ボリビアのウユニ塩湖とチチカカ湖周辺は多くの人々の生活の舞台になっている

(*3) インディヘナ ヨーロッパ人がアメリカ大陸をインドと勘違いをし、インドの人という意味でインディアン、中南米ではインディオと呼んだ。これらの言葉には階級的に劣位者あるいは卑俗的なニュアンスで用いられ差別の意味を含んでいた。これを改めて北アメリカではネイティブアメリカン、アメリカ先住民に、中南米ではインディヘナ、先住民や原住民の呼称を用いるようになった

古い歴史の新大陸

ヨーロッパからの人々、後の征服者が来る前から新大陸にはインディヘナが住んでおり、豊かで独自の文明社会を築いていた。彼らの共通の祖先は、今から2万年から4万年前にアジアからベーリング海峡を渡ってきたと推定されている。そして、メキシコ高原とアンデス山脈の

アルティプラノで定住農耕が始まり、後にアステカやインカ帝国^(*)が成立する。

インカ帝国は、現在のエクアドルからチリ北部周辺を支配し、道路網を建設し、宿駅制度を整えていた。クスコは計画的に建設された政治都市であった。巨大な宮殿や神殿は膨大な金銀で飾られていた。天空の遺跡マチュピチュや太陽の神殿などインカ帝国は、高度な農耕や金属、石垣文化で栄えていた。しかし、文字を持たなかったのがどんな人々が、どんな暮らしをしていたのか、またどんな文明だったのかなど、何もかも謎のままである。インカ帝国はスペインにより征服され、1533年に滅亡した。インカ帝国を知るには、スペインが残した記録のみである。



南米特有のデザインの布（ペルーリマ）

南アメリカ諸国は、アジア、アフリカ諸国とともに発展途上国に分類されている。独立は意外と早く、1820年代の終わりまでにほとんどが独立している。独立をリードしたのが先住民や黒人ではなく、大地主、大農園主、鉱山主のクリオーリョ達、植民地生まれのスペイン人であった。そのため、大地主制や奴隷制度など前近代的な制度を残したまま独立であった。そのため「世界の工場」の地位を確立していたイギリスの求めに応じてモノカルチュア経済国として世界経済に組み込まれていった。



インカ帝国の首都 クスコ

ヨーロッパで一次製品の需要が高まる 19 世紀後半になると、「ヨーロッパの小麦畑」になったアルゼンチン、「ヨーロッパのコーヒー畑」になったブラジル、「ヨーロッパの銀山」となったボリビアなど目覚ましい発展をとげる。そして、19 世紀末になるとアメリカがスペインを追い出し、アメリカ支配が進むようになる。

（*）インカ帝国 現在のペルー、エクアドル、ボリビア、チリ北部のアンデス山中に栄えた国家。1200 年頃に成立し、高度の農業技術を有し 15 世紀に最盛期を迎えた。1533 年スペインの征服者によって滅ぼされた。巨大な石の建築、精密な石の加工術、統治するための 3 万 km にも及ぶ「インカ道」が、首都クスコを中心に四方に広がっていた。文字を持たなかったため多くは謎に包まれたままである。

＜アンデスの生活＞

高地は平らな土地が少なく、水が乏しく、土壌も痩せており農業には不向きである。しかし、南アメリカの低緯度の地域は、高地の方が過ごし易い気候で、病虫害も少なく、人間が住むのに適している。そのため、アンデス地方の主な都市の多くが高地にある。

赤道が通る大陸の太平洋側にエクアドルがある。スペイン語で「赤道」を意味し、国内を赤道が通っている。首都キトは、海拔 2,850m で、乾燥しおり常春の過ごし易い街である。

しかし、一日の気温を見ると、日中に直射日光を浴びるとかなり暑く感じられる。紫外線が

強いので人々の皮膚は赤銅色で、深い皺が見られる。一般に空気が乾燥しているので、一日の気温の差が大きく、1日で四季を経験するといった感じである。



アンデス高地にある都市と海拔高度

都 市 名	緯 度	海拔高度	国 名
ボ ゴ タ	N04° 39'	2,640m	コロンビア
キ ト	0° 00'	2,850m	エクアドル
リ マ	S12° 05'	0m	ペ ル ー
ラ パ ス	S16° 30'	3,600m	ボ リ ビ ア
ス ク レ	S19° 03'	2,810m	ボ リ ビ ア
ポ ト シ	S19° 30'	4,067m	ボ リ ビ ア
サンチャゴ	S33° 27'	520m	チ リ

＜ジャガイモとトウモロコシ＞

日常生活で特別意識することもなく食べているもののの中に南アメリカ大陸原産のものが多くみられる。ジャガイモとトウモロコシをはじめとしてインゲン豆、トマト、トウガラシ、カボチャ、ピーナッツ、イチゴ、パイナップルなどである。中米まで目を向けるとサツマイモ、カカオ、アボガド、カシューナッツなども加わる。これらの作物を中心に農耕が生まれ、発達したと考えられる。

作物の原産地の農業地域の中南米にはマヤやアステカ文明が、アンデスではインカ文明が花開いている。自然の植物から作物を見つけ出し、食料の確保が文明発展の推進力になったことは容易に想像できる。そして、16世紀、コロンブスによってヨーロッパに持ち込まれ、アジア、アフリカへと急速に伝わった。原産地で見えるジャガイモ、トウモロコシは、日本と違い白や黒などいろいろな色、形のもものが並び、種類の多さに驚かされた。重要な作物だけに病気や虫の被害から守るために多種多様な種類を栽培しているのだという。

○ ジャガイモ

ジャガイモの原産地はチチカカ湖周辺といわれている。アンデス高原から北はメキシコ、南はチリへと広まっていった。ペルーやチリの遺跡からジャガイモを模った土器が出土していることから重要な作物だったことが解る。そして、インカ帝国の人々の重要な食物、エネルギー源となっていたと考えられる。現代でも広く栽培されており、栽培面積はコムギ、トウモロコシ、イネに次いで世界4位の重要作物となっている。



冷涼な気候や痩せた土地にも強く、栽培地域はチリからグリーンランドまで、標高は海岸から4,700mと広範囲に及び。水分と栄養分が豊富なため病害や虫の被害を受けやすい。種類が

非常に多く日本だけでも 99 品種登録されている。世界では 4,000 品種以上で、そのほとんどがアンデス地域に集中していると聞く。

もう、20 年近くの前になったが、世界で最も美しい山といわれているペルーのアルパマヨ山を求めて、食料、テント、炊事用具など荷物運搬のロバとガイドを雇用し、3 泊 4 日の山旅に出た。山間部に差し掛かったとき、インディヘナが氷河湖の畔で茹でジャガイモを売っていた。皮を剥くと日本では見たこともない鮮やかな黄色であった。バターを付けていると、塩を振りかけてくれた。美味さとともに、ねっちょりしており食べ応え充分であった。食べることに気をとられ、蚊に刺された記憶までもが蘇ってくる。

○ トウモロコシ

トウモロコシの野生種は未発見だが、原産地はユカタン半島辺りメキシコ説、ペルーからボリビア説などがある。マヤやアステカ文明の発達した地域では大規模に栽培されていた。また、インカ帝国では階段状の畑地栽培されており、祭祀や儀礼用の酒、チチャ原料として大事にされていた。

今日（2007 年）の用途は、家畜用 64%、コンスターチなど工業用 32%、直接食用 4%となっている。品種として



は、最も馴染みのあるスイートコーンはじめ、ポップコーン用、食用でもちもち食感のもの、ウシ、ブタ、トリの飼料用、コンスターチ原料用などなど用途ごとに栽培されている。

栽培には高温多照が適しており、コムギ、イネに次ぐ 3 大穀物の 1 に数えられている。生産ではアメリカが 36%、中国、ブラジル、アルゼンチンと続く。食べ方としては煮る、蒸す、茹でる、炒るなど食べ方もいろいろである。

トウモロコシというと 2010 年、南アフリカケープタウンからザンビアのリビングストーンまで 21 泊 22 日の自炊、テント泊の旅を思い出す。最も数多く食べたのがアフリカン フードの代表ともいえるウガリである。熱湯に白トウモロコシの粉を入れ、大きなしゃもじでこねて耳たぶほどの柔らかさにしたもので、味はほとんどなかった。

ウガリの食べ方は、牛、羊あるいは鶏のぶつ切り肉とタマネギやニンジンなどを煮込んだシチューを皿に取り、ウガリを皿の端に載せて食べる。これが時にはトマト味に変化するが、味付けの基本は塩で、ニンニクと唐辛子が適度に加えられていた。

トウモロコシはもともとインディヘナの人々が日々の糧にしていた作物である。コロンブスがキューバで初めて出会って、ヨーロッパ、スペインに持ち込んだ。その後フランス、イタリア、トルコそして北アフリカへと広まったとされている。

ポルトガル人が奴隷を南アメリカに運ぶ時の食料にするため 16 世紀に植民地に導入し、17 世紀には南アフリカにまで広まった。そして、19 世紀中頃、黄色いトウモロコシよりも収穫量が多い白トウモロコシが低賃金肉体労働者用に栽培され、普及していったとされている。と

ところで、トウモロコシがもたらされる以前の 아프리카で食べられていたものとしては、アフリカ原産のモロコシやシコクビエなどが知られている。

＜先住民族・インディヘナ＞

16 世紀初頭、インカ帝国の人口は 1,000 万人くらいと推定されている。それが 1570 年前後には、およそ 180 万人に減少している。わずか半世紀の間に 1 / 5 以下になってしまった。その理由は、スペイン人による征服にともなう戦闘、その後の虐殺、虐待である。加えて、彼らが持ち込んだ病気、天然痘、ハシカ、チフス、インフルエンザなどの病気によって死亡した先住民が多い。特に、天然痘やハシカに対して先住民に免疫がなく各地で流行したことが知られている。もう一つは、征服後の劣悪な労働条件下での鉱山労働が人々の寿命を縮めたことも一因である。

中央アメリカのユカタン半島、今のメキシコからグアテマラにかけて住んでいたマヤ族は、500 年頃大陸最古の マヤ文明 を築いていた。一方、それより北のメキシコ高原に住むアステカ族が、15 世紀前半アステカ帝国を築いていた。太陽神への信仰を中心に、貴族、商人、平民、奴隷からなる社会をつくり、独特の暦法や象形文字をもつ高度な文明を発展させた。ところが、コロンブスがアメリカ大陸に到着してからたった 30～40 年の間に、中南米に存在していたインカ、マヤ、アステカをはじめとする先住民の社会は次々と破壊されてしまった。



インディオたちの手づくりの織物は、赤、緑、青、黄…などの色彩、幾何学的模様は、大変鮮やかである。およそ 500 年前のインカ時代や、2000 年前の織物が博物館に残されているが、その染色技術は今日でもまねが出来ないほど優れているという。しかも、それが農民の衣服だというから驚きである。糸紡ぎは男性達の仕事で、その糸で昔ながらのやり方で布を織るのは女性の仕事である。

＜インディヘナとポンチョ＞

かつてインカ帝国をつくったアンデスのインディヘナの多くは、今も何百年と続いた民族衣装を身につけて生活している。男たちは、膝くらいまで垂れる縞模様のポンチョを着ている。リヤマカ羊の毛でつくった毛布のような布に、縦に 30 cm くらいの裂け目をつけた貫頭衣である。「かぶり毛布」ともいわれ、かぶればマントになり、脱いだ時は毛布として使われる。緯度は赤道直下に近いが、海拔 2,000～3,000m の高地なので、日中はそれほどではないが、夜はぐっと冷える。厚地のポンチョは寒さを防いでくれる。彼らは、このポンチョを風になびかせ、高地を身軽に動き回る。

女性は、飾りのついたブラウスに、膝下までの長いスカートを 2 枚から 5 枚くらいまで重ね

て履いている。新しいスカートが上に重ねられ、クルッと廻ると円ができるくらいにフワッと膨らんだ形をしている。そして、ポンチョの替わりにリヒリアという毛の肩掛けを上半身にはおり、飾りピンでとめる。更にその上に、厚地の縞模様の風呂敷を背負う。赤ん坊も、その風呂敷を使って背負う。荷物がなくても風呂敷を背負い、アクセサリーにもなっている。

また、男も女も帽子をかぶっている。黒い山高帽もあれば、濃色のソフト帽、白いパナマ帽、色のついた糸で刺繍のしてある



ポンチョ姿のインディヘナ

つばの広い帽子など、様々の帽子があり、それを見るところから来たかのか、どの部族か解かるという。インディオにとって帽子は大切なものらしく、かつて映画撮影のため、日本人がインディオの1人から帽子を借りたが、インディオがもう帰るから返せといわれ、金を出すから売ってくれと頼んだが駄



リヒリア姿のインディヘナ

目だったという。

現在のインディオの生活は貧しい。多くは、土を固めた家に住み、トムロコシやジャガイモ、豆などを栽培し、村の市場へ行き、路上へ並べて売り、必要な品を買って帰るという生活である。

<インカのお守り>

ペルーの首都リマから南東へ約 500 km、飛行機で1時間のところにクスコがある。海拔高度 3,400m でインカ帝国の首都であった。インカ帝国では、皇帝は太陽の化身とされ、国民は太陽の子とする太陽信仰を根本に据えていた。鉄器も車輪もない時代に精密な石組技術で巨石を積み上げ、全土に道路網を敷き、クスコを守る巨大要塞を築き、山の斜面には階段状に畑がつくられ灌漑水路が整備された高度な文化を有していた。文字を持たなかったので記録がなく、解明されていないことが多く謎に満ちている。このような謎多き帝国に相応しく数多くのお守りがあり、長年多くの人々に愛され続けている。

○トゥミ (左)

インカ帝国の守り神とされてきた。昔からアンデスに伝わる半月形の儀礼用ナイフで、太陽神が宿ると言われている。ナイフには秘められた力があり、禍を断ち、強運と共に未来に豊穡をもたらすとされているラッキーモチーフである。



○チャカーナ (右)

別名インカクロスで、ケチュア語で南十字星を意味する。クロスの上が東、下方が西、右が南で左が北を意味する。中央の穴は旅に出る時、何か新しいことを始める時などへの入口を意味すると共に、暗闇にさす希望の光でエネルギーが出るところとされている。インカの伝統的

なお守りである。

○スパイラル（渦巻）

ペルーに幾何学的で神秘的なモライ遺跡がある。モライとはケチュア語で「丸く窪んだところ」を意味する。クスコの北西 38 km、標高 3,500m にある同心円状に何段も組まれた段々畑で、一見渦巻にみえる遺跡である。最上部と最下部で標高差、直径共に 100m 位。方位により日照時間や風により上と下の温度差が 5℃～10℃以上にもなるという。この温度差を利用して、標高に合った作物を選び、育てたていたインカの農業試験場であったといわれている。

渦巻は古代の土器の模様、乾燥地帯で水をくみ上げる井戸の形、ナスカの地上絵にも多く見られる。渦巻は神秘的で永遠のパワーを持つとペルーでは信じられている。また、調和を表わし、いらいらを治め仲直りをも意味しているという。

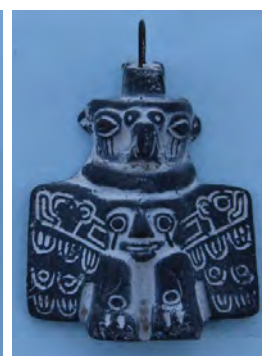


○ヤナルミ

インカの石のお守り。インカ帝国では、コンドルは神の使いの霊鳥として畏敬の念を持たれていた。インカの公用語であったケチュア語のコンドルが世界共通語の単語を残した。アンデス民謡の「コンドルは飛んでいく」が有名だが、ケーナの音と共に流れる旋律が、インカ帝国が滅亡する悲しみと苦しみが伝わってくる。また、インカの人たちは男と女、右手と左手など身近にあるものから「二つで一つ」の考え方がある。これはペアの土器から男女人形像などインカの様々な遺物に見られる。



男女交合



コンドル

○太陽と月

インカ帝国は太陽を主神としながらも月、星、稲妻などの天体、山岳や湖にも自然の神々が宿ると崇めて来た。太陽は悩みや病を追い払い、月は母なる愛で心に平安をもたらすと信じられてきた。



太陽と月（表：昼、裏：夜）

＜アンデス原産のラクダ科の動物＞

アンデス原産のラクダ科の動物は 4 種類で、標高で住み分けている。緑豊かな草原には馴染めないストイックな動物たちである。リャマとアルパカは家畜としても飼育されているが、ビグーニヤとグアナコは野生である。

○ リャマ（下右）

4,000～4,500mに住み、白、茶、白と茶の体毛で覆われている。ボリビア、ペルー、エクアドルでよく見かけた。性格は大人しく人間に慣れやすく、ボリビアやペルーでは家畜として

飼育し、荷物の運搬や毛皮は衣類、フンは燃料として利用している。肉は羊と似ており少し癖があるが美味しかった。グアナゴを家畜化したのがリャマとも考えられている。(ボリビア：ウユ二塩湖周辺)

○ アルパカ (下左)

良質の毛で衣類として利用されている。3,500～5,000mに放牧の場合が多い。インカ時代から家畜として飼育されてきた。ビクーニャよりやや大きく、グアナゴより少し小さい。威嚇、防衛のため強烈な匂いの唾液を吐きかける習性がある。クスコでステーキを食べたが、低脂肪高蛋白の赤身であった。(エクアドル：ハシエンダ)



○ ビクーニャ

ラクダ科 4 種の中で最小種、グアナゴに似ている。毛織物は最高級品のため毛皮目的の密猟、生息地の破壊、良質の肉などから乱獲で絶滅の危機にある。3,500～5,500 mの最も高地に生息している。視覚と聴覚に優れ動きも敏捷。ペルーの国章に描かれている。ペルー、ボリビア、アルゼンチン、チリに分布している。天敵はピューマ。(ペルー：チチカカ湖への途上)



○ グアナゴ

厚い体毛で覆われており、ビクーニャより長く、アルパカより短い。頭部が濃い毛で、腹部と脚の部分が明るい色の毛をしている。海拔 0～3,900mに生息し、パタゴニアからアンデスまで広く分布している。アルゼンチンでは貴重な動物として手厚く保護している。パイネ国立公園で良く見かけた。危険が迫ると 50 km/hで走る。天敵はピューマ。(パイネ国立公園)



<ケチュア語>

ケチュア族はインカ文化を支え、インカ帝国をつくった。スペイン植民地時代を経た現在でもペルー、ボリビアなどアンデス山中で暮らすインカの末裔である。アンデスの先住民の言葉で「ルナ シミ」、人間の言葉と呼ばれていたのがケチュア語で、インカ帝国の公用語だった。今日でもペルー、ボリビアでスペイン語と並ぶ公用語になっている。ケチュア族は、インカ帝国の首都クスコの背後に広がる階段状の畑をアンティと呼んでいた。これが訛ってスペイン語のアンデスとなり、後に南アメリカ大陸の背骨のように連なる山々全体の呼称になったとされ

ている。また、ケチュア語で太陽を意味するインティからインカという国名になったとも伝えられている。

ケチュア語との出会いは、世界でも有数の華麗な氷雪に覆われた峰々が連なるペルーアンデスのブランカ山群行きを夢見て資料に目を通していている時だった。憧憬の山々が現実味を帯びてきて知人を訪ね、ケチュア語、英語、日本語で書き記した手製の単語集を頂いた。2004 年、ペルーのリマから北に 400 km、標高 3,028m の登山基地ワラスからサンタクルス谷に入った時、現地で使用したためしわくちゃで日焼けしたものが手元に残っている。

例：papa（パパ）→ potato → ジャガイモ

orqo（オルコ）→ mountain → 山

sulpayki（スルパイキ）→ thank you → ありがとう

tanta（タッタ）→ bread → パン

ukyana（ウキャナ）→ drink → 飲み物 などなど

なお、ケチュア語を語源とする言葉にガウチョ^(*)、ケーナ、マテ（南米で飲まれているチャの一種）、アルパカ、コンドル、ピューマ、パンパ、マチュピチュ、ナスカなど多くの言葉が世界中で使用されている。

（*）ガウチョ 元々は野生の牛や馬を追って生計を立てている人々だったが、パンパやアンデス山脈東部で牧畜に従事するメスチソやその他の混血住民

シモン ボリーバル

アンデス山脈が縦断するベネズエラ、コロンビア、エクアドル、ペルー、ボリビア、チリの国々が独立したのは 19 世紀前半である。植民地時代にスペインの厳しい支配と収奪に対して 17 世紀から各地で先住民やメスチソによる抵抗や反乱が繰り返され、18 世紀になると更に増えてくる。そして、スペインに起こったフランスの傀儡政権からの脱却を目指すスペイン独立戦争が一層勢いづけた。ここアンデス地域の独立運動の指導者となったのが、シモン ボリーバルである。



彼は、1783 年、ベネズエラのスペイン人家庭に生まれた。植民地生まれのクリオーリョで、早くからヨーロッパの思想家、ルソー、ロック、モンテスキューなどの著作を読み、ヨーロッパの見聞を深め、中南米の独立に身を投じるようになった。そして、コロンビア→ベネズエラ→ジャマイカ、ハイチ→ベネズエラ→コロンビア→エクアドル→ペルーと転戦し、植民地から解放した。

アンデスの国々

インカ帝国を築いたケチュア族は、インカ帝国の首都クスコの背後に広がる階段状の畑をアンティと呼んでいた。これが訛ってスペイン語のアンデスとなり、後に南アメリカ大陸の背骨のように連なる山々全体の呼称になったとされている。

国土をアンデス山脈が貫くベネズエラ、コロンビア、エクアドル、ペルー、ボリビア、チリ

は、独立後互いに関係しあうことが多く、1969 年にアンデス共同市場（ANCM）を組織し発足させた。（チリは 1976 年脱退）



アンデスの語源となった段々畑

ベネズエラ（ベネズエラ ボリバル共和国）

個人的なことだが、ベネズエラの夜間はタクシーも駄目という政情不安なこともあり、これまでギアナ高地行の機会を2度逃し、隣国コロンビアと共にまだ見ぬ国、地域である。国名の由来には諸説あるが、一つはイタリアのヴェネツィアに由来するという。1499 年、この地を訪れた探検者が、マラカイボ湖畔に並ぶ先住民族の水上村落を、水の都ヴェネツィアに見立て、イタリア語で「ちっぽけなヴェネツィア」と命名したことによるとされている。

植民地時代も独立後も、アンデス北端の高地を中心に、大土地所有のもとでココア、砂糖、コーヒーなどの輸出作物を栽培してきた。しかし、20 世紀に入って石油資源が発見され、石油産業が発達すると人口の都市集中が進み経済構造が大きく変化した。1976 年、石油産業の国有化を行ったが、国内産業の多くが外国資本に支配されている。

国家経済は完全に石油に依存しており、確認埋蔵量は 17.5%で世界1（2020）、輸出収入の 96%（2014）が石油である。しかし、石油部門が雇用するのは就労人口の 0.5%に過ぎない。富は極一部の層に集中しており、膨大な貧困層を抱えている。農牧業の生産性は低く、食料品を含む生活必需品の多くを輸入に頼る現状である。このことが治安の悪化をもたらし、殺人発生率が中米のホンジュラスに次いで世界2位（2012）である。

ベネズエラ南東部にギアナ高地が横たわり、ガイアナ、ブラジルとの国境をなし、熱帯草原のサバナの真ん中に 1,000m近い切り立った岸壁に囲まれたテーブルマウンテンがある。カリブ海からの湿った空気が常に流れ込むため湿度が高く、天候が目まぐるしく変化することで知られている。周囲と隔絶されたところで動植物の特異性から「失われた世界」のタイトルで SF 小説の舞台になった。

コロンビア（コロンビア共和国）

国名は「コロンブスの国」の意味である。人口は南米大陸でブラジルに次ぐ 2 位で 4,875 万人（2016）の大国である。豊かな水資源に恵まれ電力の約 70%が水力発電である。農業国でコーヒー生産は世界 3 位、アボガドは世界 4 位、花の輸出国でも知られる。現在は石油、石炭の鉱物燃料が 2/3 を占めるようになった。また、エメラルド（*）が有名で、世界市場の 80%を占めている。

また、ペルー、ボリビアとともに、麻薬の密輸によって多額の外貨を得ており、アメリカに運び込まれるコカインの 80%はコロンビアのものといわれている。長年、反政府武装勢力のテロ活動で治安が悪化し、旅ができるのは首都付近だけといわれていたが、近年は大分落ち着いてきたと言われている。

（*）エメラルド ダイヤモンド、サファイア、ルビーと並んで人気が高いのがエメラルドで「四大宝石」の 1 つ。エメラルド王と呼ばれているのが日本人の早田英志氏

エクアドル（エクアドル共和国）

エクアドルはスペイン語で「赤道」を意味し、国内を赤道が通っている。北はコロンビア、東と南はペルーと国境を接し、西は太平洋に面している。国土は標高によって 3 地域に分けられる。中央を縦断しているアンデス地域をシエラ、太平洋岸市域は亜熱帯気候の低地でコスタ、東側のアマゾン川上流域の熱帯雨林地域をオリエンテ、これに本土の西 1,000 kmにガラパゴス諸島の島々が加わる。

ペルー、ボリビアと共に先住民の人口の割合が多い。先住民の多くは山地に住み、土地を持たない農民として大土地所有者のもとで働いている。一方、海岸地方ではバナナ、カカオ、コーヒーなどの輸出作物が栽培されている。第 2 次世界大戦後、アメリカのアグリビジネスが進出し、更に 1970 年代に東部で石油が産出し、経済活動も多様化している。首都はキトで、最大の都市は首都の外港グアヤキルである。



赤道をまたぎ記念撮影

北半球、南半球を示す S と N が見える

<赤道での体重測定>

赤道記念碑、ミッター・デル・ムンド前のお土産物屋に体重計が置かれていた。赤道で体重を測ると軽くなる。理由は自転による遠心力で、赤道での重力は極点の重力よりも 1%ほど小さ

くなる。極点で体重 60kg の人は、赤道上では 59.4kg になる計算だ。体重には空気の重さ、気圧も含まれている。標高が高くなればその分だけ気圧が小さくなる。ここキトの高度は 2,850m である。極地方では体重が重くなり、赤道では軽くなるため、南北に細長い日本では「北海道」、「沖縄」、「本州・四国・九州」の 3 バージョンの体重計が用意されている。

＜エクアドル産バナナ＞

日本でバナナと言えばフィリピンと台湾産である。世界の生産量をみるとラテンアメリカ、アフリカ、アジアがそれぞれ 1/3 で、国別ではインド、ブラジル、中国、エクアドルと続く。輸出量を見るとエクアドルが 35% でダントツ世界 1 である。

バナナは寒暖差があるほど糖度が上がり甘くなる。栽培地のコスタ地域は高低差がないが、南極から流れて来る寒流により昼夜の温度差が生まれ、甘さコクに酸味がプラスされて美味しいバナナになるのだという。現地では 1 本 2~3 円と安く、梱包用の木箱の方が高くとつくと現地の方が笑って



首都キト

いた。日本向けに特別に栽培している日本人経営の農園があるとも聞いた。また、キューバで食べた赤飯そっくりのCongriに添えられていたトストーン、未熟の料理用バナナを輪切りにした後、押し潰し油で 2 度揚げしたほのかな甘みと香ばしさを思い出す。

＜クエンカとカハス国立公園＞

ボリビアを旅した後、エクアドルの首都キト発着“Highlight of Ecuador”に参加した。カナダ、アメリカ、イギリス、オーストラリア、スイス、日本の 6 ヶ国 11 名のインターナショナルツアーである。

クエンカは首都のキトから南へ 440 km、太平洋岸のグアヤキル、首都のキトに次ぐ第 3 の都市である。インカ帝国の都市でもあったが 16 世紀に滅ぼされてしまう。しかし、その後、太平洋岸のコスタ地方とアンデス山中内陸部のシエラを結ぶ交通の要衝から農業と行政の中心として計画的な街造りが進められたという。17 世紀に入るとマラリアの特効薬キニーネとパナマ帽で急に産業が発展した。しかし、隔絶された盆地が幸いし玉石で舗装された道路や大理石や漆喰の建物など都市計画に沿った建設当初の街並みが 400 年間保存され、世界遺産の指定を受けた。クエンカとは、もともと 4 つの河川に囲まれた盆地の意味だという。

クエンカを有名にしたマラリアの特効薬キニーネはアンデス山中に自生するキナの樹皮に含まれており、インカ時代から解熱剤として利用していた。これが 17 世紀にヨーロッパに伝わり世界に広まり多くの人々を救った。

一方、パナマ帽は、ヤシの一種であるパナマ草の若葉を細かく裂き、乾燥させたものを編んでつくる。名前はパナマ帽だが、起源はエクアドルである。そもそもパナマ草の産地が太平洋岸のコスタ地方で、先住民族が古くからパナマ草を用いた帽子を使用していたという。これが手先の器用さで知られるシエラ地方のクエンカの人々によって製品化されたものだ。これがイギリス人によりラテンアメリカに広まり、パナ



パナマ帽製作所の写真から 完全手づくりのパナマ帽

マ商人を介して売買されたことからパナマ帽と称されるようになった。なかでもパナマを訪問したルーズベルト大統領が愛用したことから「パナマ帽」(*)の名称が完全に定着したとされている。

街のシンボルは、無原罪懐胎教会で大きな青いドームを乗せた屋根が印象的だが、クエンカで人気を集めているのが、アンデス山中のカハス国立公園である。クエンカの西 30 km、バスで 2 時間である。3,000 m から 4,500 m の間に広がる氷河公園で、山々に囲まれた湖が散らばる特異な景観が広がっていた。カハスの語源は、ケチュア語のカッサは「雪山に続く路」、カサは「寒い」に由来するという。



クエンカノランドマーク無原罪懐胎教会

公園内には 8 つのトレッキングコースが設けられていた。何処も氷河期に山が削られてでき



カハス国立公園（氷河公園）と氷河期の花プヤ クラバ ヘルクレス

た湖が散在していた。スペイン語のカハは「箱」を意味し、その複数形カハスの意味もあると

いう。コースの1つを歩いたが、湖の周りは湿地でいろいろな苔に覆われていた。中には赤いもの、歩くこともできる硬いものまでさまざまであった。氷河期の名残は色鮮やかに咲く高山植物にも表れていた。なかでもプヤ クラバ ヘルクレスという珍しい花に出会えた。亜熱帯気候の高地にのみ生える固有種だという。100年に1度花を咲かせるというが40年周期位だという。どっちにしても珍しいもので、出会えたこと自体が嬉しかった。青色の花がアルパカの毛のようなふわふわの毛に守られており、寒さから自衛する花だった。

(*) パナマ帽 エクアドル産なのにパナマ帽として親しまれているのと同じ例が「トルコ石」である。ペルシャ、今のイラン原産だがトルコ商人経由でヨーロッパに入ってきたことによる名称

＜動物市＞

首都のキトから北へバスで2時間、先住民族オタロバ族の住む町オタロバがある。土曜日に動物市が開かれるというので足を運んだ。会場は町郊外の広場でサッカー場程の広さだった。バス停から市場まで15分程の通りは縁日のようにバラック建ての店が並び民芸品やブタの丸焼きを店頭置く食堂などが並んでいた。織物技術の優れた民族ということだけあって綺麗な民族衣装のオタロバ族に観光客も加わり結構混みあっていた。

動物市場が近づくにつれて埋め尽くした人々の喧騒と共に動物の鳴き声と共に匂いが漂ってきた。圧倒的にウシの数が目立った。黒や茶、白と黒と様々だが、日本で馴染みの鼻環をしたものは見かけない。左右の角を紐で結び、ロープを伸ばして手綱にしていた。首と前足付根をロープに繋がれたブタ、子ブタは忙しく動き回るもの、寝転り土まみれのものと様々である。ヒツジにヤギ、イヌにウサギ、足を縛られたニワトリ、変わったところではクイと呼ばれてい



クイの丸焼き



ヤギの搾乳

るモルモットと多種多様である。人と動物に囲まれた10羽近いアヒルを棒切れ1本でまとめているおっちゃんも忙しそう。

人混みの中にロープで繋がれた5〜6頭のヤギが目に入った。注文を受けてから搾乳し、その場で生のまま飲んでいる子どもたちがいた。市場に着いたのは9時少し前だった。6時に始まっており、売買済みの牛はトラックで立去り始めていた。10時過ぎには動物の姿はまばらになってしまった。



市場帰りの少女

＜氷河に覆われた山々＞

エクアドルではアンデス地域をシエラ、山地と呼んでおり、標高5,000mを越える山が10座を数える。最高峰はチンボラソ山で6,310m、第2の高峰が世界1高い活火山で知られる

コトパクシ山で 5,897m、第3は赤道上の世界最高地点をとるカヤンベ山の 5,790mで世界的に知られる名峰である。

チンボラソ山で、ケチュア語で「雪の川」、「青い雪」の意味である。世界の最高峰はヒマラヤ山脈にある 8,848mのエヴェレスト山^(※1)だが、地球は赤道付近が膨らんだ楕円形をしている。地球の中心から距離を測ると赤道付近が最も離れており、チンボラソがエヴェレストより約 2.1 km長くなり、宇宙に最も近い山だという。

コトパクシ山はケチュア語で「光る巨大なもの」の意味。高原上から聳えているので比高 3,000mの成層火山で、5,000m以上が氷河に覆われている。近年、活火山の定義が「概ね過去 1 万年以内に噴火した火山」と見直されたので、世界 1 の活火山の座をアルゼンチンとチリの国境に聳える南米第 2 の高峰オホス デルサラード 6,893mに譲った。

カヤンベ山の南面 4,690mを赤道が通っており、赤道上で唯一氷雪に覆われた山である。イギリス人のエドワート ウインパー^(※2)がイタリアのガイド 2 名と 1880 年に初登頂している。世界最高峰とされていた山の登山と高山病の研究であつたらしい。

40 分登って登山スタート地点、標高 4,600mのカヤンベ小屋、さらに 30 分でねちりとした氷が剥き出しになっていた。



(※1) エヴェレスト山 エヴェレストの存在が文献上に初めて記されたのが中国で 1717 年。ヨーロッパに伝わったの

が 1735 年。測量によって世界最高峰では……と言われ始めたのが 1856 年とされている

(※2) エドワート ウインパー (1840~1911) 1865 年アルプスの尖峰マッターホルン初登頂。1867 と 1872 年

にグリーンランド探検調査。1879~80 年エクアドル遠征し、赤道地域の 8 つの高峰に登頂。当時ヒマラヤの高峰が広く知られていなかったため、チンボラソ山が世界の最高峰が通説であった。また、耐風性の高いウインパー

形テントの生みの親

<ハシエンダ ホテル>

ハシエンダとは、ラテンアメリカの住宅のあるプランテーション農園、牧場のことである。エクアドルは、農業に不適なところで主食のトウモロコシや米を栽培し、肥沃な海岸平野ではカカオ、コーヒー、サトウキビやバナナなどの商品作物を大規模に栽培するというプランテーション農業偏重の国である。従って、輸出に占める農産物の割



合が 50%を越えるのに食糧輸入国である。

人口 1 %の土地所有者が農地の 40%を占める前近代的土地所有制度が幅を利かせており、1 つのハシエンダの農地面積は数百 ha から大きいものは 1 万 ha に達するという。農園内には近代的な加工工場のほか教会、学校、病院などもあり一つの生活単位をなすほど広い。

宿泊したハシエンダには、立派な教会が天に向かって伸び、アルパカ牧場の背後に従業員宿泊棟が建ち並んでいた。ゲスト宿泊棟はテラスハウスで目いっぱい草花が植えられていた。床は板張りで、広い各部屋には大きな暖炉が備えられていた。飾り物というか置物は、農園、牧場に関わる歴史的なもので溢れていた。食事は、2 つのメニューから事前オーダー制で、ナイフ、フォーク類はずっしりと重い銀製だった。

＜ガラパゴス諸島上陸＞

ガラパゴス諸島は南米エクアドルの西、太平洋上約900km、赤道直下に位置する19の島々で構成されている。サン クリストバル島の空港に着いた時、赤道直下の南国のイメージである雲一つない青空、焼け付くような太陽はなかった。田舎の校舎のような木造平屋の空港ターミナルに向かう時、むっとする暑さでもなく、どこか涼しいような感じで、本来の熱帯の気候でないことを感じた。

飛行機から降りた観光客はマイクロバスに寄せられ、人気のない集落を通り過ぎ港に向かった。名ばかりの桟橋からボートで、宿泊しながら島々をめぐる船舶へと乗り移った。船舶は定員100名の大型豪華船から10人そこそこのヨットと大小様々であった。船ごとに年間を通して就航コースが決められており、ナチュラリストと一緒にないと上陸できないため、全員が何処かのツアーに参加することになる。

私たちの船は、小回りの効くヨットで定員14名だった。日程は4泊5日で、ノース セイモア島、サウス ブラサ島とサンタフェ島、エスパニョーラ島（プンタアレス、ガードナーベイ）、フロレアナ島、サンタ クルス島（チャールズ ダーウィン研究所）の島々に日中上陸し、夜、特に寝ている間に次の目的地へと移動するものだった。



ガラパゴスのスタンプ

乗船すると直ぐに、船上生活の注意事項に続いて、島での行動上の注意と決まり事が告げられた。

- ① 島への持込、放置、島のものの持出し、移動の禁止
- ② 島での喫煙禁止
- ③ 動物に触れたり、餌を与えたり、脅かしたりの禁止
- ④ 動物に2m以内には近づかない
- ⑤ ガイドより先に歩かず、ガイドの指示には絶対従うこと

などなどで、自然のままの状態を見て、保全するようにとのことだった。

＜ガラパゴス諸島と陸ガメ＞

ガラパゴスの呼び名は、大航海時代、スペイン人が初めてこの島々にやってきたとき、どの

島にも陸ガメの一種、ゾウガメが沢山いたことから「イスラル ガラパゴス」、スペイン語で「陸ガメの島」に由来している。

ダーウィンがガラパゴス諸島に上陸したのは1835年。島ごとに形の違うゾウガメの甲羅をヒントに、「種は環境に適応して有利な形に変化する」と『進化論』を唱えたことで知られている。ピンタ島で見つかったたった1頭のピンタゾウガメは、チャールズ・ダーウィン研究所で保護飼育され、「ロンサムジョージ」、ひとりぼっちのジョージと名付けられ、ガラパゴス諸島国立公園のシンボリック的存在として親しまれて



いた。独りぼっちでは寂しいだろうということで、近い亜種のメス2頭とペアリングも試みられたが、繁殖までは至らないまま2012/6に生涯を終えたことが新聞、テレビで報じられた。

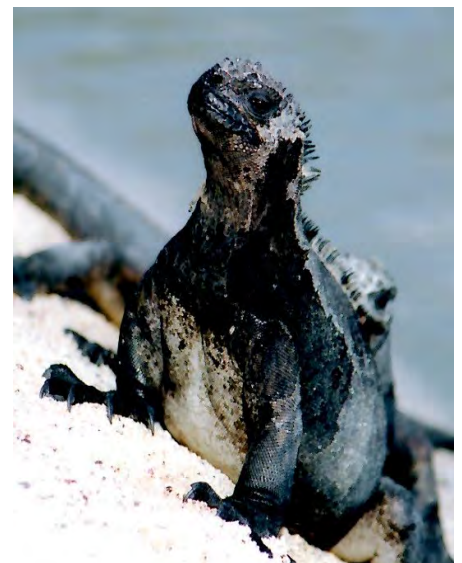
飛行機から見るガラパゴス諸島の島々は荒涼として、火山噴出物に覆われた赤茶けた荒地という感じで、野生動物の楽園、進化論の聖地などから想像するような光景とは縁遠いものだった。ガラパゴス諸島は海底火山の活動によって誕生した。エクアドル本土から太平洋をおよそ1,000km、赤道から緯度で1度と離れていない赤道直下に点在している。16の主な島を中心に、123の名前のついた島々からなるガラパゴス諸島は、4つの島以外は無人島である。人口はおよそ25,000人（2010年）で、観光、農業、漁業などで生計を立てている。

ガラパゴス諸島は、1535年に偶然発見されたといわれている。そして、18世紀から19世紀中頃にかけて、この海域で活躍した捕鯨船が、島々のゾウガメを食料にし始めたことから楽園は一変した。肉は美味しく、長期間餌を与えなくとも生き続け、ひっくり返しておくとも自身では起き上がれないため暴れもしないため動物性蛋白源になった。

大洋上の荒涼とした孤島であることが幸いし、島の動植物の多くは何千年という歳月の間に独自の変化を遂げ、進化に関する生ける実験室となった。ダーウィンが島を訪れてから百数十年後にチャールズ・ダーウィン研究所が造られ、進化の過程研究が進められている。そして、エクアドル政府がガラパゴス地域のほぼ全域を国立公園に指定して諸島独特の生態系は、未来に残すべき地球の宝物として手厚く保護している。ガラパゴス諸島の動植物は、独自に進化を遂げた固有種の宝庫として1978年に世界自然遺産第1号として登録された。

＜ダーウィンと今西錦司＞

海によって他の大陸とは隔離された環境にあったため、この諸島固有の生物が多く生息している。例えばガラパゴスリクイグアナ、ウミイグアナ、ガラパゴスペンギンなどである。1835年にイギリスの調査船ビーグル号は南米南部を調査した後、この諸島に立ち寄った。これに乗っていたダーウィンは島の動物からヒントを得て「進化論」を考えついたとい



われる。進化論とは、生物が環境に適応しながら自然淘汰を経て進化してきたとする理論である。

＊ 最も強いものが生き残るのではなく、最も賢いものが生き延びるのでもない。唯一生き残ることが出来るのは環境に適応して変化できるものである。

＊ 自然淘汰とは有用でさえあれば、いかに小さな事であろうとも、保存されていくという原理である。

生物の社会は競争原理によって成り立っているとするダーウィンの考えに対し、今西錦司氏(*)は共存原理から次のように論じている。

「生物の社会（世界）は競争ではなく、種ごとに棲み分けをしており、それらの種はそれぞれの種ごとにあるとき劇的に変化する」という種ごとの棲み分けを基礎に据えて種社会論、イマニシズムを展開した。

(*) 今西 錦司（いまにし きんじ、1902～1992） 日本の生態学者、文化人類学者、登山家。京都大学名誉教授。日本の霊長類研究の創始者。京都の織屋「錦屋」の生まれ。第二次世界大戦後、京都大学理学部と人文科学研究所でニホンザル、チンパンジーなどの研究を進め、日本の霊長類社会学の礎を築いた。満州北西部の大興安嶺探検（「大興安嶺探検」1942年探検報告書）が有名。彼の探検冒険は道筋をつけて後輩に譲るのを常としていたことで知られている

ペルー（ペルー共和国）

国名は Biru というインディヘナ首長国の名がペルーに転訛した。国土は太平洋岸に細く伸びる海岸平野と、アンデスの山岳部、東部アマゾン川上流部の森林地帯とに大別される。このうち、海岸平野では都市化、近代化が進んだ。水産業と水産物加工も盛んで、魚粉が肥料、飼料用として輸出されている。人口の 30% くらいを占める先住民の大部分は南部の山岳地帯に住んでいる。ここでは穀物の生産と牧畜が中心である。また、植民地時代には山岳地帯で金銀が産出したが、20 世紀にアメリカ資本で、銅、亜鉛、鉄などの鉱山が次々に開発された。しかし、外国資本や大土地所有制度に縛られた経済から農地改革や国有化への努力をしているが、なかなか実を結んでいない。

<インカトレール>

2002 年、リマから空路で標高 3,400m のクスコに入った。クスコはケチュア語で「ヘソ」を意味し、1200 年代から 1532 年までインカ帝国の首都であった。同時に文化の、経済の中心でもあった。聖なるプーマをかたどって造られた都といわれているが、証明するものはない。1533 年に入ってきたスペイン人により略奪、破壊されたが、インカ時の石垣の上に建てられたスペイン人による建造物を見ることができる。地震国にあ



って 500 年過ぎてもびくともしない石垣は、カミソリの刃入
の石

クスコの石垣で見られる 12 角

らないほど精密に積まれている。文字をもたなかったので石垣のノウハウを知る手掛かりはないが、彼らは石を溶かす薬草があったのではと思いたくなる。

クスコを見下ろす位置にサクサイワマン城壁がある。全長 360m のジグザグ型で三層の石の壁である。大きい石は 200 トンを越すという。これらを 50 km 先から運んできた。彼らは車輪も鉄製の道具も知らない民であった。考えられるのは人海戦術のみである。

目指すマチュピチュは、クスコの北西 70 km 先の山の上である。インカトレールを辿って 3 泊 4 日、43 km のトレッキングである。インカトレールは、その名の通りインカ帝国時代に造られた道路網である。1 トポ、約 7 km ごとに里程、約 19 km ごと



にタンボ、宿駅を設け食料の備蓄庫を設置していたと言われている。北はエクアドルのキトから南はチリのサンチャゴまでの間張り巡らされた網の目の道路は全長 40,000 km といわれているから、これから歩く距離は小さな点に過ぎない。

出発地点はクスコ郊外のチルカ、標高 2,600m である。世界で最も人気のあるトレッキングコースで世界中から人々が集まる。自然と環境、更には遺跡保護の観点から様々な規制があった。個人での入域は認められていない。ライセンスを有するツアー会社主催のツアーに参加が条件だった。また、1 日 500 名まで、キャンプサイトは指定され、ゴミは完全持ち帰りであった。

インカトレールを歩いて 4,200 m の峠を超え、3,500m を越えるところでのキャンプ、1 日で 1,200m の登り、1,000m 下るコースだったが、会社で雇用したポーターたちがキャンプ用具、食料などを運び、テント設営から炊事、キャンプし到着時の茶の用意と、至れり尽くせりだった。最小限の個人装備のみの身軽なトレッキングだ。参加者の国籍を見ると、アメリカ、カナダ、オース



アンデス山中のインカトレール

トラリア人、ヨーロッパが圧倒的に多い。3日目のキャンプサイトでリーダーから、友人のグループに日本人が居ることを知らされた。夕食前に訪ねてみると、カナダ人夫妻と日本人の3人グループだった。東京在住だが山形西高山岳部卒の方だった。

トレッキングは、氷河に覆われたアンデスの山々と遺跡を眺め、インカ時代の石畳を踏みしめ、アンデス特有の草原を過ぎ、サヤクマルカ遺跡ではビルカバンバ山群最高峰サルカンタイ、6,264mを眺めるコースで申し分なかった。

最終日、未明にキャンプ地を出発し、マチュピチュ正門、「太陽の門」で日の出を待った。幸い天候が味方してくれた。朝日がマチュピチュを照らし始めた。500年前のインカの人々と同じように歩いて見るマチュピチュの感動は大きかった。みんなで手を取り合って感激に浸った。その後はしばらく黙って立ちすくんでいた。

<マチュピチュ>

15世紀のインカ帝国の都市遺跡で、ウルバンバ谷に沿った尾根上で2,430mの高地にある。2,940mのマチュピチュ山と2,690mのワイナピチ山の間で、急崖の上にあるため山裾からは遺跡の存在は解らないことから空中都市のとも呼ばれている。1911年^(*)、アメリカ人ハイラム・ビンガムが、この地でインカ時代の道路を探検していた時に山の上で発見した遺跡である。

当時のマチュピチュには750人位生活していたとされているが、遺跡中心地は神殿跡で、作業場跡、住居址と続く。これらの建造物を取り巻くように急な山腹を切り拓いた段々畑である。限られた範囲内にコンパクトにまとまっている。



アンデス山中のマチュピチュ

この天空都市の目的は何であったのか。特殊な場所に造られた単なる都市、帝国は太陽を崇拝し、皇帝は太陽神の子とされ暦の仕事の司っていたと考えられることから、太陽の動きを観察する目的があったのか。確かに遺跡の東西両側が断崖になっていることは太陽の動きを知るには好都合の地形

であり、太陽の神殿に冬至と夏至を知る石窓があった。日時計と思われるインティワナコもあった。急峻な山の遺跡となると要塞とも考えられる。それとも何か大切な儀式を執り行うための特別な場所だったのだろうか。それとも、クスコとマチュピチュ間は巡礼の道として賑わっていたのだろうか。完全な計画都市であるが、謎に包まれた都市遺跡である。

遺跡内で圧倒的に目立つのは石の建造物である。500年という歳月が石だけを残したともいえるが、神殿、宮殿の精巧極まりない石垣から住居址や段々畑の少し雑な石垣まで見ることができる。なかでも太陽の神殿は、遺跡の中で唯一曲線をした美しい形をしている。石は計算し

て切り出されたのだろうか、表面は磨き抜かれている。更には石垣の内部では互いの石に凹凸をつけて噛み合わせているとも聞いた。宮大工が用いる継手と組手の技術である。これを石でとなるともやは神業といえる。

ペルーは地震国である。マチュピチュを断層が走っているともいう。地震が起こるとインカの建物は踊りだすと言われている。地震の揺れで石と石がぶつかり合い、揺れの収まりと共に石は元の所に戻ると言われている。15 世紀前半から 16 世紀前半までの間、文字も鉄製の道具も車輪も持たない民が、巨大な石の建築物を造り上げ、畑を耕し、動物を飼育し、金銀を掘り、自給自足ながら精神的にも豊かな生活を送っていたことが容易に想像できる。しかし、インカ帝国は 1533 年にスペインにより滅亡した。マチュピチュの目的、精密な石垣、首都クスコとの関係、同時に、明らかになっているインカ道から枝分かれした路が何処に通じているのかなど謎に包まれたままである。

(*) 近年、1902 年にクスコの農場主アグスティン リサラガが、ベンガムより 9 年早く発見説が浮上している



太陽の神殿

＜ナスカの地上絵＞

2002 年、クスコ、マチュピチュ、アマゾンジャングル、チチカカ湖を廻り、その後、リマの業者を介してペルーの首都リマから南東へ 440km のナスカに向かった。バスで 10 時間を要した。翌日、アレグリア航空の 4 人乗り小型機が、砂利を敷いただけの滑走路からあっという間に飛び上がった。地上絵が描かれているところは、海岸に並走する丘陵とアンデス山脈の麓に横たわる盆地だというのが、飛行機からは解らなかった。ナスカ川とインヘニオ川の間に広がる一切の植物をも拒否した少し茶色がかった濃い灰色の荒野が現れた。目を凝らすとクモ、イヌ、サル、ハチドリ、宇宙人風の人物像などなど巨大像が次々に望まれた。何の統一性もなくばらばらに散らばっている感じた。小型機は左右の席から見えるように急旋回を繰り返した。



地上絵が描いたのは、1 世紀から 7 世紀頃にナスカ文明を築いた古代インカ人と推測されている。日本の歴史に照らし合わせると弥生時代中頃から飛鳥時代の終わりころだから、卑弥呼や聖徳太子の頃である。いったい何の目的で描かれたのか。自分たちが描いたものをどうやって何処から全体像を眺めたのだろうか。

表面の砂礫を取り除き、その白っぽい土で描かれた絵や幾何学図形は 1,000 を優に超し、さらに近年発見が相次いでいる。年間の降水量が 25 mm にも満たない沙漠だとしても、2,000 年近くの間変化することもなく存在し続けることも不思議だし、地上絵のキャンバスとな



った荒野が残っていることも現実を超越している。ナスカの人々は、黙して語らぬ大地に何のメッセージを託したうか。

【余談】山形大学は現地での長年に渡る地道な学術研究と新たな地上絵の発見、さらに保護活動などが評価されペルー文化省から正式に許可された世界唯一の研究チームになっている

＜チチカカ湖＞

チチカカとは周辺に住む先住民族の言葉で「石のピューマ」、「灰色のピューマ」を意味する。地図を見るとピューマが野うさぎを食べているように見えなくもない。しかし、その昔、誰が空からチチカカ湖を見たのだろうか。

アンデス山脈中央部、ペルーの南部とボリビア西部にまたがる弱塩水湖で、標高が 3,810m。汽船などが航行する湖としては世界最高所である。湖面の 60%がペルー領で、40 %がボリビア領になっている。



チチカカ湖の地図（パソコンより引用）

チチカカ湖周辺の中心都市は標高 3,855mのプーノである。ボリビアとの国境近くにて、アンデス山脈のほぼ中央に位置している。インカ帝国の創始者マンコ カパックが降臨したという伝説があり、帝国時代にはかなり重要な役割を果たしていた。また、滅亡時にインカ帝国の金銀財宝を湖底に沈めたとの言い伝えも残っている。湖の年間平均水温は 10℃。夏は 13～14℃で、冬は 8℃。水深 5～6mからは年間を通して 4℃とかなり低い。しかし、多くの魚類が生息しており、なかでもマスは重要な蛋白源となっていた。

現在、5つの河川が湖に流入、1河川が流出している。湖面は降水量によって年間 1m前後上下する。1943 年、雨が極端に少なく 7m低下、1988 年には 4m上昇した。最大水深は 281mで、面積は琵琶湖の 12 倍である。湖



面の平均高度は 3,800m である。かつて海底だったところが隆起によってできた湖であり、湖水の塩分は 0.90%である。

＜チチカカ湖の浮島＞

プーノからボートで 30 分。トトラでできた浮島のウロス島に着いた。ウロス島とは多くの浮島をひとまとめにした呼称で、2,500 人ほどの先住民、アイマラ族が住んでいる。湖面に顔を出しているトトラを刈り取り、その根の塊を浮島の基礎にして、刈り取ったトトラを束ねて重ねさらにその上にトトラをわらのように敷き詰めていた。上陸した時は想像以上に快適と思えたが、島端のトトラは腐っており、羽音が聞こえるほどの羽虫が一斉に飛び立った。



乾燥したトトラ

トトラ舟に乗せてもらった。舟底に当たるところに腰を下ろすのだが、舟底は分厚く、見晴らし台のように高かった。波の高い時は危ないのではと思えるほど沈んでいたが、7〜8 人乗ってもびくともしない浮力に驚かされた。頭に刷り込まれている舟の概念とは大分違う貴重な体験だった。再び、ボートでアマンタニ島に向かった。途中でボートが止まった。船長の粋な計らいで航行可能な湖として世界最高所で泳ぐことになった。



<アマンタニ島で民泊>

船着場には民族衣装の島民が集まっていた。民泊先の人々の出迎えだった。女性は黒い布を被り、鳥や花の鮮やかな刺繍を施した白いブラウス状のシャルの上から虹色の帯状の紐を巻き、真っ青なスカート姿だった。民泊の家は島の中腹にあるという。船着場から上り坂を 30 分ほど歩いた。チチカカ湖は富士山の頂上とほぼ同じだから、富士山頂からの登りに等しく、ゆっくりゆっくりと歩を進めても息が切れた。

二階建ての家は手入れの行届いた畑の中に建っていた。宿泊先の部屋には裸電球が一つ、タンクの水でトイレを流した。夕食の時、飯を炊いた器は土器だった。畑でとれた野菜料理は、素朴な島の暮らしの中では精一杯のもてなしに思えた。夜の帳と共に星が瞬きだした。湖面を渡ってきた風は背丈の低い樹木を撫でる音を発した。しかし、星の明るさは夜本来の暗さを、風の音は静かさを演出しているに過ぎなかった。そして、人工物も植物も少ない武骨な大地を流れる時間が気持ちを落ち着かせてくれた。



<世界で最も美しい山 ネバド アルパマヨ (5,947m) >

アルパマヨは 1966 年、ドイツの山岳雑誌が世界の著名な登山家、探検家や旅行家 65 名にアンケートをとり、「世界で最も美しい山」に選ばれ、世界中から注目されるようになった山である。「日本百名山」の著者で知られる深田久弥氏が「鋭い三角錐のまことに胸のすくよう

な美しい姿」と描写し、未完に終わった「世界百名山」の一つに選んでいた。北西側から見ると懸垂氷河に覆われ、南西側は無数のヒマラヤ巒の美しい三角錐の姿をしたペルーアンデスにあるブランカ山群を代表する山である。なお、アルパマヨとは、ケチュア語で「大地の川」を意味するという。

ブランカ山群への登山基地である標高 3,090m のワラスは、最高峰のワスカラン山をはじめ、氷河に覆われた 6,000m 級の山々が望まれた。宿のオーナー紹介のガイドを雇い、3泊4日



のアルパマヨ探訪に出た。ガイド、ロバ方と私の3名の食料、テント2張りそれに寝袋をはじめとする個人装備をロバに運んでもらった。2日目の午後、アルパマヨ氷河の直ぐ下にテントを張った。明け方の冷え込みが酷く、寒さで目を覚ました。テント内部に霜がびっしりと張り付き真っ白になっていた。テントの入口から顔を出す時、霜のシャワーにあったが、澄んだ空気のもと青空を背景にした氷雪のアルパマヨがそそり立っていた。

<セビッチェ>

スペインに征服される16世紀までインカ帝国が栄えていたペルー。ペルーアンデスの山間部はジャガイモ、トマト、サツマイモ、トウガラシやトウモロコシなど、現在世界中で日常的に食べられているものの原産地である。

ペルーの文化遺産にもなっている「セビッチェ」は、ペルーを代表する料理の1つで、白身魚中心のマリネである。小骨を取り除いた生の魚を1～2cm角くらいに切り、これにみじん切りしたタマネギとトマトを加え、レモンを絞って混ぜ合わせる。これにパセリやオレガノなどの香草、トウガラシを好みで加え、オリーブオイルと塩で味を調えたものである。

韓国水原の刺身、エクアドルのクエンカで食べた魚貝

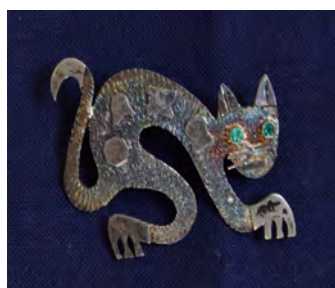


類のスープでお腹を壊したことを思い出しながらも、ペルーに行って真っ先に食べたかったのがセビッチェだった。鮮度の悪さからくる匂いを心配したが、酸味が利いており生臭さは感じられず美味かった。日本を代表する刺身の一つを、遠く離れたペルーで味わった。現在ではラテンアメリカ全域はおろか、魚介のマリネ自体をセビッチェと呼ぶほど世界各地に広まっているという。

ボリビア（ボリビア多民族国）

ボリビアは 1825 年、シモン ボリーバルらの独立運動指導でスペインから独立。国名はボリーバルの国の意味。ボリビアは、国土の 1/3 近くをアンデス山脈が占めており、6,000m 級の山が 14 座もある高原の国である。隣国ペルーからボリビアにかけてのアンデス山脈中央部は、幾つかの山脈が並走し、その間の盆地や谷があり、幅が 600～700 km にもなる。なかでもペルーとボリビアの国境になっているチチカカ湖を中心とする広大な高地、アルティプラノは、古くから人々の暮らしの舞台となってきた。先住民族の多いボリビアでは民族衣装、チョリータ姿の女性を見かけた。髪は三つ編み、山高帽を被り、ポリェラという襷が多く裾が広がったスカート姿だった。

憲法上の首都はスクレだが、議会をはじめ政府機関の多くはラパスにあり、事実上の首都となっている。ラパスは臼鉢状の独特の地形をしており、中心街は臼鉢の底の部分、空気の濃いところにある。最も低いところにある中心街でも標高が 3,600m で、世界最高所の首都で、「



ボリビアの記念品（フローチと土笛）

雲の上の街」とも呼ばれている。

植民地時代から 19 世紀末までは金と銀、20 世紀以降はスズが、ボリビア経済を支えてきた。そして、2001 年に石油、世界最大規模天然ガス田が発見され、さらにウユニ塩湖には、自動車用バッテリーなどで今後需要拡大が見込まれているリチウム鉱床が世界埋蔵量の半分以上が眠るといわれている。

＜世界で最も高いところにある国際空港＞

2007 年のボリビア行は、成田からカナダのトロント経由でボリビアの首都、ラパスまでの飛行時間はおよそ 30 時間。着陸前、アンデスの 6,000m 級の山々が連なり、陽光を照り返す白く美しい光景を楽しんだ。しか



窪地の底が一等地

し、飛行場付近は、樹木はなく赤茶けた平坦な大地が広がっていた。ラパスは隣接する掘鉢状の窪地で、家々が斜面を這い上がり平地の荒野まで達していた。

ここエルアルト空港は、標高 4,000m を越える世界 1 高所にある国際空港である。着陸した飛行機は、空気抵抗が少なくブレーキがなかなか効かず、もう 1 度離陸するのと思うスピードで滑走路を走る。離陸はもっと大変で、特に空気が暖まる日中の大型機は容易に飛び上がれないと聞いた。

入国手続き、ターンテーブルに向かう足取りはみんなゆっくりだ。空港には高山病への備えの酸素ボンベが見える。空気が薄いということは気圧が低いということであり、これに体が順応できなくなるトラブルが高山病である。スクレへの国内線乗換のためとぼとぼと歩いている時だった。頭が何となくふらっとした。高山病の初期症状である。

<憲政上の首都スクレ>

4,082m のラパスのエルアルト国際空港から直ぐに 2,810m のスクレに飛んだ。ラパスで



感じた高山病の症状はなくなった。ラパスの空港付近の一面赤茶けた光景が、整然とした白壁と明るい茶褐色の瓦屋根の街に一変し、爽やかな気候が心落ち着く雰囲気を出していた。

スクレは、1545 年にポトシで発見された銀鉱山が隆盛を極めていた頃、産出される銀を管理するためにスペイン人によって造られた街、鉱山の監督者や技術者が静養する街であった。そして、1826 年、ボリビア建国から 1890 年まで名実ともに首都でもあった。

郊外で見つけたという恐竜の足跡の化石を訪ねた。セメント会社が工場建設している時に偶然見つかったものだという。丘の上の公園だった。専門家によると、6,500 万年前のもので 10m を越す巨大肉食のティラノサウルス、装甲をまとった草食アンキロサウルスなど 8 種類の足跡が確認でき、世界最大級の足跡の化石だという。足跡は垂直に近い岩壁にくっきりと伸びていたが、平坦な泥地が地殻変動で垂直になり、泥は乾燥し石灰岩へと変化したのだという。

スクレは今も憲政上の首都であるが、最高裁判所が残るのみで議会と政府はラパスに移り首都の機能を失ってしまった。出窓をもった建物や道路の排水溝などスペイン風スタイルが色濃

く残っていた。祭壇の美しいラメルセー教会などを回った後、バスでポトシに移動し 3 泊してからウユニに向かった。

＜コカティ＞

ボリビアではハーブティをマテと呼ぶのでコカティは「マテ デ コカ」となる。コカティは、生または干したコカの葉数枚をカップに入れ、熱湯を注ぎしばらく待ってから飲む。好みに砂糖を入れる。極めて日常的な飲みものでティーバッグも売られていた。宿ではコーヒーと肩を並べいつでも用意されており、滋養強壮、高山病による食欲不振や倦怠感を和らげる効果もあると聞き、日本茶のようにつつい手がした。先住民族はコカの葉を神聖なものとして治療や儀式活用してきた。高地での栽培に適しており疲労感や眠気薄まるとして使用されるようになったという。

1886 年のコーラ飲料発売当初にはコカの葉が使用されていたと聞いた。市場では山積みされた葉が売られており、コカ入り飴、チョコレートもあった。この辺りの高地の人々には生活に寄り添った普通の飲み物である。ティーバッグをお土産にと思ったら、コカインの成分を抽出できるほどの量ということで日本への持ち込みは禁止だった。記念品を探しているときコカの葉を 1 枚入れたペンダントを見つけ持ち帰った。なお、コカの葉自体はコカインの濃度が薄いので依存症や精神作用はほとんどないということだった。



＜ハエもゴキブリも住めない街＞

ポトシはアンデス山脈中の盆地にあり、標高約 4,000m と人が住む都市としては世界最高地点である。高山地域のうえ乾燥気候であるために植生には乏しい。銀鉱脈の発見で 1546 年に鉱山町として生まれ、人口も一時は 20 万人を数えた。スペイン統治時代、45,000 トンの銀などを産出したが、19 世紀には掘り尽されてしまう。その後、19 世紀末からはスズが大量に採掘されるようになり活気を取り戻すも、現在ではスズもほぼ枯渇している。しかし、今なお手掘りで作業を続けている坑夫たちがいた。

ポトシは、今でも馬車が交通手段の主力を担う街だった。いたるところに排泄物が落ちていたが、1 匹のハエも見当たらず不潔感がなかった。世界 1 高所の都市は、ハエも棲息できないところだった。背後には、赤茶けた禿山「富の山」セロ リコが横たわり、昔から変ることのない服装のインディヘナが、ゆっくりと歩いてい



ポトシの街から見る「富の山」、

山」セロ リコが横たわり、昔から変ることのない服装のインディヘナが、ゆっくりと歩いてい

た。

セロ リコから採掘された銀を貨幣にするため 1572 年に立てられた造幣局があり、JICA で働く日本人と会した。ハエのことを話したら、この街にはゴキブリも居ないと教えてくれた。今から半世紀前、パンジャブヒマラヤに向けてのキャラバン中、立ち寄ったチャイハネでどうにもならないほどのノミをもらった。しかし、5,000m のベースキャンプでの生活中に一匹も居なくなってしまったことを思い出した。無敵を思わすハエやノミよりも、ヒトの方が余程しぶとい生き物であることを実感した。

＜「宝の山」であり「人を食う山」＞

ポトシはボリビアの首都ラパスから南東へ 630 kmにある小さな街である。1546 年にスペイン人によって造られた世界一高所の都市である。16 世紀から 17 世紀前半に大量の銀を産出した。ここの銀はスペインに運ばれ、スペイン王家の繁栄と対外政策を支えた。

市内観光の目玉は、世界最高所の鉱山に入るツアーであった。鉱山ツアーには装備が必要だ。粉塵まみれの泥坑道を腹這いで進むための作業着が貸し出されていた。洗ってはいるようだが鉱物で黒ずみ、汗染みがあり、ホコリ臭かった。そして、ヘッドライト付きのヘルメットである。このツアーの別名は「お土産持参ツアー」である、ツアー客を乗せたトラックは坑道に向かう前に市場に寄り、酒、たばこそしてコカの葉を購入する。500 年以上前と変わらない過酷な条件で働くしかない工夫へのお土産であった。標高 4,600m から坑道に入った。スズ鉱石を積んだトロッコが、背伸びすることもできないタヌキ掘りの坑道を、人力で細々と行き来していた。あちこちでデニムに上半身裸でつるはしを握って硬い壁を掘る工夫たちは、無表情無反応である。休憩している工夫やすれ違った工夫に土産を渡すと、その瞬間だけグラッシャスの言葉と笑顔が戻ってくる。

標高 4,800mを越す坑内の休息所には等身大に近い男性の胸像または立像が飾られていた。やせ形で赤ら顔、ひげを生やし、しばしば角が生えている。これは、スペイン人を鬼に見立てて作られたものだという説があるが、ティオと呼ばれる彼らの守り神である。タバコをくわえさせ酒を捧げて機嫌を取り、坑内の安全を祈願するのだという。鉱夫たちは朝、採掘場所に行く途中でティオに挨拶をし、夕方にはお礼を言って帰る。この間、彼らは昼食もとらずにコカの葉を口いっぱいに入れて疲労と空腹を押さえながら作業を続ける。落盤などの事故での死者もいれば、換気の悪さからくる病気で死亡者も多かったという。彼らは奴隷であり、タダ同然で何十年もの間働かされた。スペイン統治下でひたすら採掘し続ける道具として使い捨てられた人々の数は 800 万人



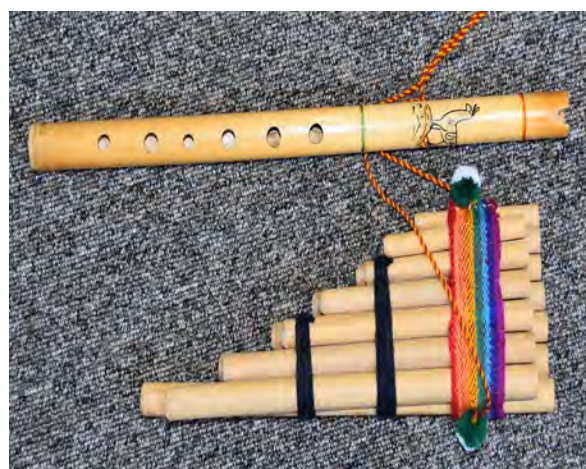
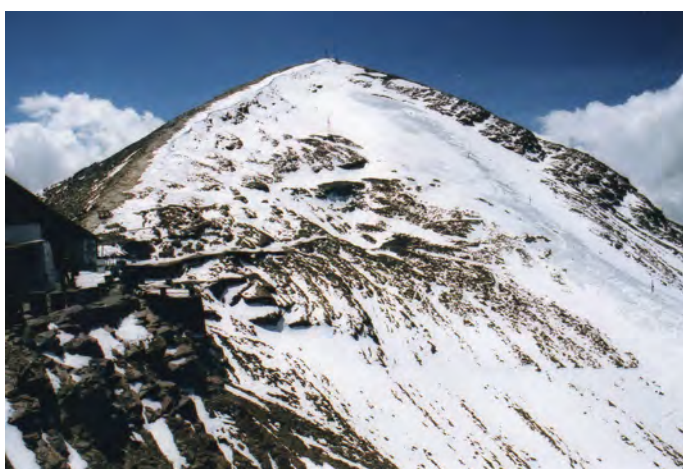
人を食う山の入口（写真中央）

に及ぶともいわれる。これらの命を吸い取った山を、人々は「人を食う山」と呼んだ。労働機関を終えて生き残った場合には、高額賃金が支払われると約束され、それを励みに働き続けたというが、それを受け取ることができたのは極わずかだった。スペインにとっての「宝の山」は、ポトシの人々には「人を食う山」だった。

1987 年、セロ リコ銀山を含め、他の構造物とともに世界遺産に登録された。奴隷制度の象徴として、負の世界遺産に数えられている。

＜何処も高地＞

ポトシでは鉱山ツアー、カリカリ山のトレッキングと市内散策で過ごした。ポトシ鉱山坑道入り口の標高が 4,600m、ガイドの話では坑道を 4,800mまで行っただけと言っていたが、あまり実感はなかった。トレッキングは一番奥というか、最後の民家の上方で引き返したので、お



5,400m、氷の粒のスキー場（右雪上にリフト） アンデスの民族楽器ケーナ（上）とサンポーニャ（下）
よそ 5,000m弱。ウユニ塩湖の最高地点が 3,760m、インカトレールツアー宿地の最高地点が 2 日目の 4,198m、ツアー 3 日目が最高地点で 5,200mだった。その間、全く高山病の症状がなく、塩湖と荒々しくも美しい自然を存分に堪能することが出来た。その後、夜行列車で 3,706mのオルコに出て、バスで 3,600mのラパスに戻った。ラパスでは 4,080mのティワナク遺跡、5,400m世界最高所のスキー場^(*)、市内 3,800mのムリリョ広場周辺を散策したが、ここでも頭痛などの症状は出なかった。

エクアドルに入って、氷河地形が面白いカジャス国立公園の 4,075m、コトパクシ山とカヤンベ山での氷河が 4,950mと 4,650mまで登ったが、体はいたって快調だった。この度の行程をみると、上手く高度順応できるようになっていた気がする。それに、体調と相談しながら自分の気持ち一つで動き得たことも大きな要因かもしれない。

(*) yahoo Japan 6/25 2021 「ボリビアの『世界 1 高所のスキーリゾート』は、なぜゴーストタウン化したのか」の記事が掲載されていた。ボリビアにはかつて、1930 年にオープンしたチャカルタヤスキーリゾートがあった。海拔 5,300m に位置し、世界最高所のスキー場とレストランがあった。これはエヴェレストのベースキャンプよりも高所だった。18,000 年前から存在していたというチャカルタヤ氷河が 2009 年消滅し、付近はゴーストタウン化した

＜高山病＞

高山では空気中の酸素の量が少なくなる。そのために人体に起こる様々症状の総称が高山病である。地球をとりまく大気の圧力、気圧は、地表に近いほど大きく、遠ざかるにつれて小さくなる。そのため、大気の密度も地表から遠ざかるほど薄くなり、酸素の量も次第に少なくなる。平地の酸素の量を 1 とすれば、高度 5,330m で $1/2$ 、8,530m では $1/3$ 近くまで減少するという。酸素が少なくなれば、一回の呼吸で摂取する酸素量は少なくなる。それを補うために呼吸は早くなり、心臓の動きも活発になる。人間誰しも酸素の量をいきなり $1/2$ 、 $1/3$ にされたら気を失うまでに時間を要さない。幸いヒトの体は時間をかければ高度に順応する習性をもっているため、高所での登山なり、旅を続けることが可能になる。

しかし、酸素不足の環境で何日も生活すれば、高所の悪条件が身体と精神に悪影響を与えることは確かである。ポトシでお会いした JICA の O さんは、「ここポトシでの 1 年は他所のところの 2 年分に相当する」と嘆いていたのも肯ける。個人的な経験からすると、頭髮（白髪）、目（視力）、皮膚（皺）などに顕著に表れるような気がする。

ところで、高度順応の結果、体の変化の一つに赤血球の増加がある。承知の通り、赤血球は体内に酸素を供給する重要な役目を担っている。従って、酸素の不足する高所では、赤血球の増加は極めて重要となる。単純に考えれば、酸素が平地の半分になったとき、体内の赤血球が 2 倍、 $1/3$ になれば 3 倍に増加すればよいことになる。しかし、赤血球の増加にも限界があり、2 倍まではどんどん増えるが、それ以上はあまり増えないという。さらに、赤血球の増加は血液の粘度を増し、血管内で血液がつまることによって起こる病気、血栓症をまねく恐れがでてくるという。これらの兼ね合いからすると高度順応の限界は、個人差はあるが 6,000m を少し越えたあたりという資料を読んだことがある。

日本山岳会、元副会長さんの大森 薫雄 氏によると、高山病は治療よりも予防する方が効果的であり、その具体的な方法として下記のことをあげられている。

- ① 高所ではゆっくり登る。決して急がない。
- ② 自分のペースを守る。
- ③ 水分を十分とり、尿をたくさん出す。

尿の色が薄ければ薄いほど、回数が多ければ多いほど、水分補給が上手くいっている証拠である。高所では赤血球の増加によって血液の粘度が増すのを薄めるためにも水分の補給には気を配る。

- ④ 自分自身の健康管理が大切である。

目安として呼吸数が 40 回/分（正常は 20 回/分）、脈拍数 120 回/分（正常は 60 回/分）以上になったら危険信号である。

- ⑤ 3,000m まで登ったら、何の異常がなくとも 1 日停滞して休養を取る。
- ⑥ 事前にメデカルチェックを受けておく。

＜ウユニ塩湖＞

スクレからバスを乗り継ぎポトシ経由でウユニに来た。バスターミナルには客引きが待ち構えていた。安宿を紹介してくれた方を通して 3 泊 4 日ツアーを申し込んだ。

アンデス山脈が隆起し始めた 40 万年前、大量の海水を溜めたままの湖が山の上に残った。その後、乾燥した気候の時期があり水分が蒸発し、塩だけが残ったのがウユニ塩湖である。一面真っ白で雪原に居るような錯覚を起こす。海拔 3,700m、東西 250 km、南北 100 km で、面積 10,582 km² で、東京都の 5 倍である。塩が 20 億 t と見込まれ、リチウム電池の原料として注目を集めていた。高低差が 50 cm でほぼ真平である。中央部にサボテンが茂る島があり、昼食の場所になっていた。ランドクルーザーが 15 台ほど止まっていたが、1 台の例外もなく全てが日本車だったのに驚いた。ここのサボテンは、一年に 1 cm しか成長せず、最大級の 5m 近くあったから 500 年位前から生え、枯れる事無く育っていることになる。



塩のブロックで建てた売店

塩の表面が、雨水で数 cm 覆われると、太陽の光に反響して鏡のような美しい姿をみる。神秘的な風景は「天空の鏡」と比喻され、見る者に驚きと感動を与える。どこが空との境界線かわからない。



雨で 1 日遅れの出発だったが天空の鏡が待っていた

〈ウユニ塩湖の先〉

標高 3,700m のウユニ塩湖、正確には広大な塩塊の平原だから「塩原」とよぶべきだろう。世界で最も広大な平面で、中央にあるサボテンの茂る「魚島」で昼食をとってから、ランドクルーザーは塩の平原を抜け、チリのアタカマ砂漠に抜ける荒野の道に入った。

ウユニ塩湖と違って水を蓄えた湖と沙漠が織りなす自然は、空の青と大地の茶褐色と湖の薄いピンクが 6,000m級の雪山を背景に次々と現れた。奇跡の赤色湖、ラグーノコロラドに群れ



圧倒的な自然を前にすると人は言葉を失い黙りこくってしまう

るピンクのフラミンゴの美しさにそれぞれのお国言葉で歓声が上がった。

雪がうっすらと積もった沙漠の中に幾筋ものタイヤの跡がみえる。走っている所が道で、定まった車道はない。4,000～4,500mの荒野をひたすら走った。ここは誰が呼んだのか「宝の道」だという。石ころが転がる沙漠に「石の木」が現れた。巨大な岩が沙漠を流離う砂で浸食され、頭でっかちの形で立っていた。圧倒的な自然の力に押し潰された人間からは一言の言葉も出てこない。押し黙ったままの重苦しい時間が続いた。チリとの国境近くで、塩沙漠のアタカマ砂漠へ抜けるメンバーと別れ、ライオン岩やラクダ岩などの奇岩の間を抜け、氷の張った湿地で餌を漁るビッグニャを眺めながらウユニの街に向かった。

<何処にでも美味しいものがある>

ボリビアには海がない。しかし、ペルーとの国境となっているチチカカ湖は琵琶湖の 12 倍もあり、国内で売られている魚のほとんどを産している。魚の種類は少ないようでトゥルーチャと呼ばれるマスとイワシの一種のペヘレイをよく見かけた。オリジナルの調味料で味付けしたトゥルーチャのフライが美味この上なかった。



魚食民族の日本人は外国で魚の誘惑に駆られる。鮮度の落ちた匂いに辟易することが多いが、チチカカ湖のトゥルーチャは、ポルトガルの魚やトルコ、ガラタ橋近くの小舟で揚げるアジのフライと並んで美味かった記憶が残っている。

ボリビアでポピュラーなもう一つ食べものがサルティーヤである。小麦粉の生地炒めたタマネギや鶏肉、ゆで卵などの具を包み、オーブンで焼いたもので、巨大餃子状のもの。甘みと辛味があってなかなかの美味だった。

<内陸国ボリビアの海軍>

ボリビアはアンデス山中の内陸国である。地図を見るとチチカカ湖が目立つが、目ぼしい河

川は見当たらない。ここに 1,700 人（2007 年）の海軍と、ほぼ同じ人数の海兵隊員がいる。ボリビアは独立当時、太平洋に面した海洋国家だった。ところが、1879 年、チリ硝石探掘権をめぐる戦争に敗れ、400 kmの海岸線と 12 万 km² の領土を失った。チリとは隣国ながら犬猿の仲で正式な国交もない。

「海への出口」を求め、国際司法裁判所（ICJ）でチリと争っている。ボリビア海軍は、140 年前に失った太平洋岸の国土を取り戻した時に備えてか富士山山頂と同じ高度のチチカカ湖で軍事演習を続けている。同時に、チチカカ湖は密輸や麻薬取引に利用されることもあり警戒と任務を兼ねているという。

＜旅と言葉＞

ボリビアを旅した後、エクアドルでキト発着” Highlights of Ecuador” に参加した。カナダ、アメリカ、イギリス、オーストラリア、スイス、日本の 6 カ国 11 名だった。英語に最も苦労したのも、スペイン語を全く理解できないのも日本人 1 人だった。でも、街の真ん中に放り出されてもそれほど困らなかったし、アメリカ人と同室だったが言葉で苦労することもなかった。ボリビアやエクアドルで参加したツアーの何処で、誰に、どれ位迷惑をかけたか解らないが、結構巧く旅を続けられた気がする。勿論、ツアー前にリーダーやガイドさんに自分の英会話の程度を話し、集合時間などはミーティングの後に確認させてもらった。また、咄嗟に質問できないもどかしさに苛々することがあったが、言葉に不自由が故に行動が消極的なことなく、動き回り、可能な限り話をして来た。しかし、おしゃべりとなると少なからず淋しい思いをした。皆が大笑いしているのに笑えないのはまだしも、自分が話をする则会話が途切れるのが心苦しかった。スペイン語の会話は全く駄目でも旅は続けられたが、英語も全く駄目だったら中南米に 1 人で旅発ったかは大いに疑問である。

旅先で「南米の旅は何回目か」の質問が 3、4 回あった。自分にとって中南米の旅は 3 回目で、5 ヶ月になる。これを聞いたキューバのハバナツアーのガイドさんから「5 ヶ月にもなるのなら、美しいスペイン語をもっと覚えなさい」と言われた。日本語は、イタリア語とスペイン語のように同じものから枝分かれした言語と異なり全く別の言葉であることを言いたかったが、英語やスペイン語理解への努力不足は率直に認めざるを得なかった。

余談になるがスペイン語を理解できないが故に、自分の不注意から嫌な思いをした例を書き記しておきたい。

＜ボリビア＞

ラパスで宿泊していたホテルの料金が朝食付 16\$ だった。会計の段になったら 18\$ だという。そんなはずがないと身を乗り出して帳簿を覗き込んだら 16\$ と記されていた。勿論、16\$ の支払いで済ませたが、油断も隙も無い安宿であった。（ホル ガルガ）

＜パナマ＞

パナマは自国の紙幣はなく US\$ 紙幣を“バルボア”、硬貨は“センタボ”（C）として使用していた。パナマシティで投宿した 1 泊 25\$ のホテルでコーヒーを飲んだ。スペイン語の 75¢ が聞き取れないでいたら、吊り上った目にメガネの小太りおばさんは 1\$ と言いつ返してきた。カウンター内のコック帽のおじさんが何も言わずに 75 と紙切れに書いてくれた。以後、このおばさんが居る時はレストランの利用を止めた。（ホル ベラルス）

<キューバ>

ハバナでエアコン付ルームとなると最低料金が 40\$ だった。大きな荷物を預かってもらい 2泊3日の遠出をした。預かり料2\$だという。そして、再び投宿して2日後、1泊2日の預かり料は無料だった。勿論、別々のボーイである。先のボーイは私と同じかそれ以上に英語を話した。後の方のボーイとは殆ど会話が成り立たなかったが、仕事前にネクタイを結んでやった縁で、顔を会わすたびに握手を交わしていた。2\$は調子の良いボーイのポケットに収まったに違いない。不審に思ったら領収書の請求をすべきだった。(ホテル コリーナ)

その一方で、治安の面で中南米1の悪名高いパナマのコロンで、約束の料金20\$のところを25\$支払い、その上チップ5\$を弾んでも余りあるほど楽しいタクシーに出会ったことも付け加えておきたい。(コロンから南西に約30kmのルソ行で利用—世界遺産の要塞)

パラグアイ (パラグアイ共和国)

パラグアイはボリビア、ブラジル、アルゼンチンに囲まれた内陸国である。ブラジルとアルゼンチンのような大国でもないし、ペルー、ボリビアのような観光資源にも恵まれず、日本からのツアーがない珍しい国である。国旗は表裏で異なる珍しいデザインである。

国名はグラニー語で「大きな川」を意味するとする説が有力である。国の南西部を流れるパラナ川がブラジルとの国境をなし、イタイプダムを共有している。ここでの水力発電は世界最大級で、国内の電力需要を満たし、電力輸出国でもある。国内総生産の27%が農業で、輸出の84%を占めている。おもな輸出品は大豆と小麦で、大豆輸出量は世界3位である。しかし、10%の人口が国土の66%を所有し、地方人口の30%は土地を所有できず、人口の40%が貧困層とう不平等さが緊張状態を生んでいる。

<アスンシオン国際空港>

忘れられたようなパラグアイが意識の中に入ってきたとき、何故かインドシナ半島のラオスが脳裏を過ぎった。ラオス行を勧める人は、何が良いのか解からないが、兎に角、気持ちがゆっくりするのだという。事実、ラオスには、私たちがとうの昔に失ってしまい、忘れかけている自然界のリズムに添った生活があった。日の出と日没が基準の単純明快な生活リズムである。このようなラオスに似たものに惹かれてのアスンシオン入りだった。

ブエノスアイレスから空路でアスンシオンに入ったが、入国審査は国内線と変わりなく、



パラグアイの国旗



表面は「パラグアイ共和国」と書かれた国章

裏面は「平和と正義」と記されたライオンと自由の帽子の紋章

これで終わり?!というほど簡単だった。国際線到着ロビーの一般的な光景である氏名を書いた紙片を持った出迎える姿もなく空港は閑散としていた。ホテル案内を探した見当ない。警備員らしき制服姿の方にたずねると、こっちに來いと奥まった事務所に通された。そして、日本人ということで日本系人経営のホテルに連絡を入れてくれた。

<アルバフェステバル>

道路の石畳は波打ち、剥がれていた。通り両側の建物も壁が剥がれたり、壊れたり、街はお世辞にも綺麗とはいえない。しかし、行き交う人々の表情は穏やかであった。碁盤目状に区画された通りの表示は時折飛んでいたが、地図を頼りに歩いて英雄広場にでた。木立の下でチェスに似た遊びに興じる大人たちの姿があった。



チリのサンチャゴの路上やアルゼンチンのブエノスアイレスの鉄道駅近くでの血走った目での賭けごとと違い、時々笑みがこぼれるのどかな光景であった。公園内の木陰の石段に集団で腰を降ろす学生達の姿は何とも微笑ましい。



霊廟前で威勢の良い音楽が響いてきた。軍人の吹奏楽団をバックに、銃を持った軍人を従えて 5~6 人の要人が霊廟入口で深々と頭を垂れていた。突然、霊廟前の通りに人々が集まり始めた。殆ど同時に賑やかな音楽が響きわたり、白を基調にしたコスチュームの美女団を先頭にパレードが現れた。霊廟前に進んだ美女たちは、日の丸をはじめ 5 カ国の国旗が掲げられたアルバ、グアラニーハープ演奏会場に花を添えていた。これからアルバフェステバルで、国旗は世界的なアルバ演奏者の国籍を讃えたものであることを知った。霊廟前の通りには、トラックの荷台を利用して俄仕立てのステージがあり、たちまち人人人で埋め尽くされた。でも、ファーストフード店前には客用のイスがあり、霊廟脇の路上では 4~5 人のグアラニー族が路上に腰降ろし、手作りのお土産物を広げたままだ。首都アスンシオンの中心部に、特別行事のハレと日常生活のケが同居するおおかさがあった。



<国会議事堂とスラムが隣り合わせ>

国会議事堂から 2 ブロック西に移動。

地図では確かに大統領府、通称「ロペス氏宮殿」である。ロペスと葉初代大統領の長男で、二代目大統領である。彼が私邸として建てられたものを 1994 年から大統領府として利用している。近寄りがたい雰囲気はまるでない。普段着の人々が敷地内に入り、通り抜けて行くのが見えた。建物内には入れなかったが、手入れの行き届いた緑が眩しい庭を見ながら背後に回れた。裏手のパラグアイ川沿いの広場に後ろ足で立つ馬上で剣をかざした勇ましい銅像があった。電

大統領官邸背後

線を避けてカメラに収めようとほんの 5～6 歩、住宅が密集するスラム地区に入った時だった。通りすがりの警察官から直ぐ戻るように注意された。パラグアイもまた南米特有の不平等国家で、地方人口のおよそ 1/3 が土地を持てず、働き口を求めて都市に出てきた人々の溜まり場がパラグアイ川辺に集約されているらしい。

<海軍と水軍>

緑の芝生と赤い花をつけた木立が映える大統領官邸があった。日本の官邸の規模がどれ位なのか知らないが、コ字形の二階建てでかなりの広さだった。建物左側に伸びる道路をたどったら官邸の背後に回りこみ、芝生の広大な広場がパラグアイ川まで続いていた。川辺には細身の軍艦が 1 艘停泊していた。旧式で錆付いた船体はどう見ても一戦を交えられる代物には見えなかった。2 人の兵士が見えるが、少し沈み過ぎの船体は動くのだろうかと思えた。

パラグアイは海を持たない内陸国である。それで海軍?! そういえば、ボリビアにも海軍があった。両国とも無益な戦いの結果、海を失うという共通した歴史を有している。任務は国境の河川警備で、海軍ではなく水軍の呼称を用いていたが、実態は河川軍に近い感じであった。

そもそも国名のパラグアイが「大きな川」を意味し、アスンシオンはラ プラタ川最大の支流であるパラグアイ川岸に発展した港町である。

1537 年、スペインによって造られた古い街で、ラ・プラタ川方面から入ってくるヨーロッパ人の休憩地であり、食糧補給地の役割を果たし、「都市の母」の呼び名で親しまれてきたという。ごちゃごちゃした風景は如何にも港の雰囲気を漂わせていたが、一国の屋台骨としては如何にも貧弱で、日本だったら地方の小さな漁港規模だった。



<パラグアイ刺繍>

アスンシオンのメインストリート、パルマ通りに向かう途中、歩道に商品を並べたレコバ市場がある。商品の中心は美しいパターンのレース編みと色とりどりの糸で幾何学文様を優美に刺繍したアオポイ、同国伝統工芸のグアラニー語で「繊細な布」である。

ニャンドゥティ、グアラニー語で「クモの巣」を意味する刺繍には、先住民族に伝えられている民話があるという。酋長の息子が婚約者への贈り物を探してジャングルに分け入り不慮の死を遂げる。変わり果てた姿を発見した恋人が涙の涸れるまで泣明かしたときに見た美しいク

モノの巢に由来するという。



元々はスペインから伝わったレース編みが、長い年月をかけてパラグアイの風土、自然の中で生まれた独特の配色と濃淡法による刺繍である。幾種類もの丸、正方形や長方形のモチーフを組合せ、動植物を抽象化したクモの巣のように繊細である。色彩も様々で、白、アイボリーホワイト、オレンジ色やブルー系統などの組合せなどなど変化に富んでおり孔雀が羽根を広げたようなカラフルなものまであった。

＜パラグアイの国民食＞

どこのレストランでも最も目につきやすい所は「チパ」と「エンパナーダ」の指定席だった。チパは、焼きたてが香ばしく一段と美味しかった。基本的には、南アメリカ大陸原産のマンジョウカ、別名ユカ、キャッサバ、タピオカのでん粉、トウモロコシの粉と、スペインが持ち込んだ食材、牛乳、チーズと鶏卵を材料としたもちりした食感のパンで。言い換えれば、先住民族のグアラニー文化と、宗主国スペイン文化が融合した産物といえる。

一方、エンパナーダは南米で広く親しまれている食べもので、丸い皮の中に、鶏肉、タマネギ、トウモロコシ、鶏卵などの具をいれ油で揚げるか、オーブンで焼いたものである。どちらも、



チパ



エンパナーダ

国民的なスナックであり、どこでも手に入る。昼食は、コーヒーとチパのバリエーションである一口サイズのチピータと、饅頭のように丸めて肉を入れたチパソオで済ませた。

＜薪で走る観光列車＞

英雄広場から南東に移動し旧鉄道駅舎に向かった。パラグアイの鉄道は 1989 年に廃止になったが、イギリスとドイツの指導の下に 1856 年に建設がはじまり、1861 年に開通している。当時の日本は開国直後であった。南アメリカではチリに次いで 2 番目、乗客用では初めて

と古い。そして現在、日曜日限定で観光用として植物園駅からアレグア駅間 35 kmを薪で走っていることを知った。10:00 始発に合せて植物園駅に向かった。駅名からして、動植物園入口に立てば視界に入るとばかり思っていたが、背伸びしてもそれらしきものは見えなかった。入園料金所で尋ねると、通りを左手に進めという。仕草からするとかなり遠そうだ。1 km余りも急ぎ足で歩いた。柵も何もない草原の中に客車を連結した機関車があった。もう直ぐ発車というのに人影はなく、機関車が燃料を燃やし準備している様子もない。待合室のような所で尋ねたが、言葉が通じないので全く要領を得ない。促されるまま後ろについて行くと、改札口に張り紙があった。運行日は隔週日曜日で、今週は運休であった。

観光列車というから遊園地を走る機関車を一回り大きくしたくらいのものと勝手に想像していたが、鉄道黄金期を偲ばせる手入れの行き届いた広軌の雄姿だった。機関車に乗ってみた。薪を燃やす釜から地面が見える。客車は一回り小さく、お見合い席が並んでいたが、床は古風な板張りであった。パンフレットによると、35 kmを1 時間半ほどで走り、途中民族音楽の演奏やショーがあり、スナックとドリンクのサービスがあるという。アレグアには3 時間滞在し植物園駅着が16:30 頃に戻るとあった。



<市場>

市民の台所、メルカド4は、宿から直ぐであった。通りの両側、市場の内外とも店がひしめき合い、商品が山と詰まれ、あるものはこぼれ落ち、物売りの声が響き渡り市場特有の活気に満ち溢れていた。肉、チーズ、野菜、果物、衣類や生地、靴、小鳥などなどに分けられており、人々はそれを縫って歩く。集まる人間の胃袋を満たす屋台や食堂のメニューは軽食中心だが、大きなパンに野菜と肉を挟んだものは自分の1 食分を遥かに超えていて手が出なかった。

回帰線に近い国だけに、スイカ、メロン、パイナップル、マンゴーなどなど色とりどりの果物は見事だ。ブランドもののスニーカーも重なり合っていたが、値段を見る限りどうも疑いたくなる。大通りに面した屋台で野菜や果物から離れて売られている根のついた植物が目に入った。後で解かったが、餅つきの杵と臼のミニチュアのようなもので突きつぶして飲む生のマテ茶、テレレであった。ここの喧騒ぶりはサンチャゴ、モンテビデオの市場より、どこか東南アジアに似ており、心和む雰囲気があった。

ウルグアイ（ウルグアイ東方共和国）

東方共和国の「東方」とは、アルゼンチンとの国境を流れるラプラタ川の支流ウルグアイ川

の東岸を意味している。国土の 88%が可耕地のパンパで、馬、牛、羊などを飼育する農牧業の国である。南米の国家としては、面積、人口共に小規模だが、チリに次いで高い生活水準である。人口の 3 倍を越す牛を飼育し、1 人当りの牛肉消費国は世界トップクラスで、年間 60 kg である。

首都はモンテビデオで、1520 年世界一周中のマゼラン船隊がモンテビデオ西方の丘を見つけて、「われ、山を見たり」(Monte vide eu) に由来するとか。17 世紀初めにスペイン人が牛、馬を移入したのが繁殖し、17 世紀中頃から急速に発展した。パンパという土地の豊かさからブラジルに進出していたポルトガルと、アルゼンチンを活動の足掛かりとしていたスペインとの間でいざこざが繰り返された。その結果、街にはスペイン風とポルトガル風建築スタイルが残っている。

<ラプラタ川河口>

ラプラタ川は、氷河期の海面低下時に侵食された谷が沈降して三角形、ラッパ状の入り江で三角江、エスチアリーと呼ばれている。ブエノスアイレス付近の幅は 50 km だが、河口付近 270 km、東京と名古屋間に匹敵する。ジェット機を 900/h とすると 18 分を要するとんでもなく広い河口である。水深は大きく、後背地は大平原のパンパで世界有数の貿易港となり、ブエノスアイレスとモンテビデオの首都が面している。

余談だが、アマゾン川の河口は 300 km とも 500 km ともいわれ、ラプラタ川を上回るが、アマゾンの河口は水の流れている部分と中州とが複雑に入り組んでおり、河口の定義がはっきりしない。一方、ラプラタ川は正真正銘の水面で、アマゾン川を上回っており世界一幅広い河口と言える。

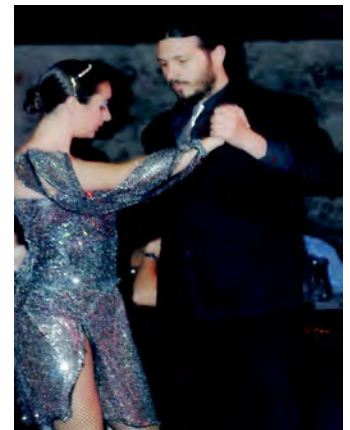
マゼランが西回り航路でアジアの香辛料産地モルッカ諸島を目指してラプラタ川河口に来たのが 1520 年。当時知識ではここが南米大陸の南端で太平洋に抜けられると信じていた。小さな船で太平洋への出口を探すが、河口であることが解るまでに 1 週間を要している。

ブエノスアイレスからモンテビデオへフェリーで渡った。川幅を実感する意味から所要時間 2 時間 15 分的高速艇を避けて、4 時間 45 分の普通のフェリーにした。

<タンゴの故郷>

「タンゴ」というとアルゼンチンが思い浮ぶ。アフリカ黒人奴隷によってカリブ海の地域にもたらされたハバネラと呼ばれるキューバ音楽がアルゼンチンに伝わり、ブエノスアイレスの港町ラ ボカ地区を中心に独自の発展をとげて広まったのがタンゴといわれている。アルゼンチンのガウチョツァーでタンゴを見る機会があった。また、ウルグアイのモンテビデオでタンゴ発祥地はウルグアイの看板を見たし、連日タンゴショーが開かれていた。宿にあったパンフに惹かれタンゴショーに出かけた。

どちらのタンゴも露出度の高いセクシードレスを着た女性が男性と密着した官能的な踊りとアクロバティックな踊りを披露していた。その一方で何となく女性への繊細な心遣いと温かみが感じられた。そ



して、ショーの途中から音楽に合わせて身をくねらす客が続出し、フィナーレのステージ前は、踊り手と客が一体となって踊り狂う男女で埋め尽くされた。会場の興奮状態がしばらく続くのも同じで、熱い血を受け継ぐラテンアメリカの一面であった。これらを見る限り、タンゴの故郷は、ラプラタ川兩岸の港で生まれた文化に思えた。

【資料】パラグアイとウルグアイの国名由来

南米の中央部にパラグアイとウルグアイの似たような国名の2つの国がある。

・パラグアイ (Republic of Paraguay)

グアラニー語で、「大きな川」の意味。Para は大きな川、-guay も「川」の意味である。国内をパラグアイ川が流れている。また、「鳥の飾りものをした帽子 (paragua-i)」との説もある。グアラニー (Guaranies) は、パラグアイの先住民族であるインディヘナの1部族

・ウルグアイ (Oriental Republic of Uruguay)

正式国名は「ウルグアイ東方共和国」(Republica Oriental del Uruguay)。ウルグアイは、グアラニー語で「曲りくねった川」の意味。Uru は曲流、-guay は「川」を意味する。また、「鳥の住む川」との説もある。国土の90%以上が牧場で典型的な牧畜の国。対岸のブエノス・アイレスの喧騒をよそにヨーロッパの地方都市のように静かで、道行く人々もどことなく穏やかだった

チリ（チリ共和国）

国名の由来は、インカ帝国の中心クスコから遠く離れていることから先住民族の言葉で「地の果て」、先住民族ケチュア語 Chiri とすれば「寒い」、この地を支配していた先住民族の長 Tili から転化説などがある。

西が太平洋で、東がアンデス山脈で南北 4,630 km、東西 180 km と南北に極端に細長い。北は平均高度 1,000m の塩沙漠のアタカマ沙漠で、硝石と銅の産地で知られる。南緯 40 度以南はパタゴニアで、フィヨルドが発達し、特異な形の岩山、氷河、草原、湖沼などで知られるトーレス デル パイネ国立公園があり、アルゼンチンのロス グラシアレス国立公園と国境で接している。

1818 年に独立し、19 世紀の終わりごろ硝石の世界的な輸出国になった。その後、銅山の開発が軌道に乗るようになり、世界的な銅の輸出国になっている。しかし、銅産業は全面的にアメリカの多国籍企業に支配され、小麦やブドウの実る土地は少数の大土地所有者に集中していた。これを 1970 年に強引に農地改革を実施し、銅産業の国有化を断行したが、アメリカの抵抗で経済状況は大混乱を引き起こした。国内外の批判の高まりにより 1990 年に民主政治に復帰し、経済や生活水準が安定しているが、国民の所得格差、不平等などの問題を抱えている。

<首都サンチャゴ>

カナダトロント経由でのサンチャゴは、30 時間弱のロングフライトだったので、時差も関係なくぐっすり眠れた。街に出たとき、ベーカリー前は食欲を刺激する匂いが漂う時間だった。

首都サンチャゴは、世界一細長い国のほぼ中央にある。最適気候の地中海性気候で乾燥しており快適だ。旧市街地は、植民地時代の重厚な建築物と石畳の道路で落ち着いた雰囲気だ。向かったのが、カトリックの国チリの総本山であるメトロポリタン大聖堂。内部は薄暗いが教会特有の厳かな雰囲気、何かと陽気なチリ人だがみんな静かだった。

大聖堂前はアルマス広場で、大道芸人が特技を披露し、芸術家が絵画を売り、市民の憩いの場であり、血走った目が集まる賭博の場でもあった。

昼食を求めて中央市場に向かった。チリはサーモンの養殖が世界 2 位、日本が輸入しているサケ、マスの 70% 近くがチリ産である。鮮度の良さそうな大小さまざまな魚が並んでいるが、魚屋特有の威勢はあまり感じられなかった。その奥にある小さな店が並ぶフードコーナーは客呼びの聲が飛び交い活気に満ちていた。建物の内装はレトロで美しく、店内の衛生状態も申し分なかった。日本人と解ると妙なアクセントの「ウニ」の日本語が耳に入ってきた。



魚入りトウモロコシグラタン、パステル デ チョクロで空腹を満たした。薄めの塩味、いたってシンプルで食材の味そのもの味わう料理であった。再び市場を回ったが、地中海性気候区の市場にしては、野菜や果物のスペースが少ないのが気になった。聞いてみると、それならベガ市場だという。

＜プンタ アレーナスとマゼラン海峡＞

プンタ アレーナスの中心にムーニョス ガメーロ広場がある。広場というより公園だった。ここに大砲に脚をかけたマゼラン像が、先住民族アラカルフ族 2 人と人魚、地球儀の上に建っていた。先住民族の右足に触れると、旅の安全祈願になるといわれぴかぴか光っていた。

道路を挟んで、壮麗さを留めるユニオン会館が建っていた。チリがマゼラン海峡に対する統治権を強めるために建てられたと聞く。1914 年、運河が開通するまで太平洋と大西洋を結ぶ船舶の燃料などの補給基地として賑った時代を象徴する建築物なのだろう。1849 年、黄金を目指してやってきたスペイン人によって開かれた港だが、吹き抜ける寒風は昔と変わることなく、雨降りでも傘をさす者は皆無だった。





マゼラン像



住民の右脚

今、目の前にしている海峡は、およそ 500 年の時を遡り、世界史に顔を出すマゼランによって発見された。先年、キューバのハバナで見た純白のコロンブスの像、インド、マラバル海岸のコジコーデ、バスコ ダ ガマが到着した地点に立った時も同じだったが、瞬時に頭を切替えることができず戸惑ってしまった。頭では解かっている、自分が今、歴史的な場所に立って居ること自体が信じられないのだ。

マゼラン海峡の発見は困難を極めたことで知られている。乗組員総数 270 人程度で出航し、帰国したがたった 18 人ということからもうかがい知ることができる。ラプラタ川河口の湾、三角江を海峡と誤認した糠喜びの反動、南緯 40° 付近が海峡と記入された地図への不安、ポルトガル人のマゼランへのスペイン人乗組員たちの疑惑や不信感、帰国要求の反乱、大量の食料を積んだ船の脱走、そして海峡に入ってから 20 日以上が悪戦苦闘それに慢性的な食糧不足などなどあげれば切がない。今、目の前にしている難破船が横たわる海峡が、このような悲劇の幕開けの場所であると同時に、強靱な信念に基づく企画と行動力で世界史にマゼランの名を刻むことになった舞台である。

＜火の国 フェゴ島＞

マゼラン海峡は横殴りの冷たい雨に煙っていた。フェゴ島からの船からバスが腹を擦りながら出てきた。何台もの車を吐き出したフェリーはなんと奇妙な形をしていた。船舶中央部の膨らんだところ幅 3m が人間用で、残りは大型バス、トラック 3 台横に並ぶ広さだった。



パタゴニアは大陸の南端、マゼラン海峡までである。その先は多くの島々からなり、最も大きいのがフェゴ島である。島の走り始めはパタゴニアの延長という感じで、丈の短い灌木と草が続いた。

この地の土壌は白っぽく微細だ。動物が生きるための十分な餌になるとは思えないが、ヨーロッパから来た狩猟民族の血を引く航海者達は、海難に備えての非常食用として牛、馬、山羊、羊を放し飼いでいたと聞いた。また、その後に品種改良した羊の飼育を始めたというから感心する。

南へしばらく進むと、突然森林地帯が現れ緑豊かになった。島の北部の大部分は平地が緩やかに起伏しているが、南部はアンデス山脈の名残をとどめており、森林から険しい山岳地帯へと変化していた。そして、島の南西部に横たわるコルディラ ダーウィン、ダーウィン山脈に発達する氷河が、何と全アルプス山塊を遥かに越えるという。それでいながら、最高峰はたった2,600m でしかない。ここは南緯 55 度「南の最果ての地」である。

フェゴ島の別名は「ディエラデル フェゴ」、火の国であり、名前そのものが興味をそそる。語源は、マゼランが海峡を通る時、島の海岸で多くの火が燃えているのを見た。大きな船が突然現れたのに驚いた先住民族のナオ族が、恐れおののき火を燃やして連絡を取り合ったのではとされている。パタゴニアにきてから 3 回目の国境越えの手続きを済ませ、再びアルゼンチンに入った。

アルゼンチン（アルゼンチン共和国）

銀の意味をもつラプラタ川に因み 1810 年の独立の時、「銀の国」の国名になった。東京からアルゼンチンの首都ブエノスアイレスへは、カナダのトロント経由で 30 時間余の飛行時間である。日本との時差は 12 時間で、季節は逆になる。

ブエノスアイレス発祥の地は、市街地の南東部、ラ ボカという港町である。イタリア系移民が多く住みついたところで、ここで歌われ、演奏され、踊られた音楽から生まれたのがタンゴとされている。歌詞には様々な不満が歌われ、踊りには抑圧された心理状態が反映されてか、自虐的な、あるいは刹那的な振りが見られるという。安定した生活を営み、厳しいモラルを尊重した中産階級の人々とは縁がなく、むしろさげすまれた人々の間に親しまれた。1920 年代に歌手、カルロス ガルデル以来多くのファンを魅了し、アルゼンチンの国民音楽として、世界に広まった。1 人当たりの 1 日平均カロリー摂取量は、3,268cal と高い。この国では、少なくとも動物性蛋白質不足することはない。

アルゼンチンの農業が飛躍的に発展したのは、19 世紀末冷凍船の発明により生肉の輸出が可能になってからである。第 1 次世界大戦前に、牛肉の輸出が世界 1 になっていた。小麦の輸出も飛躍的に伸び、近年では世界で 5 番目の輸出国となり、1000 万 t を輸出している。そして、ヨーロッパの穀倉地帯、世界のパン籠と呼ばれるまでになった。また、メリノ種の羊の飼育も盛んになり、羊毛生産も世界 6 位と急増した。農業の主産地は、ブエノスアイレスを中心に扇形に広がる広大なパンパである。



ガウチョショーでのタンゴ



フロリダ通りの路上タンゴ



カミニートの土産店の絵画

<パンパをバスで横断>

ブエノスアイレスを中心に半径約 600km の半円形を描く地域、ラプラタ川流域に広がる平原をパンパと呼んでいる。その広さは関東平野の約 60 倍、日本の2倍近い面積である。そして、年間降水量 550mm を境に東側を湿潤パンパと大陸内部に当たる西側の乾燥パンパに分けている。

アルゼンチンの人口の 3 分の 1 がここに集中しており、国内の耕地の 80%、牧草地と放牧地の 60% を占める農業の中心地である。また、小麦の 95% はここで生産される世界的な農業地であり、世界有数の牧畜地域でもある。パンパの広大な土地を所有する農牧業経営者はエスタンシエロ、農牧場をエスタンシアと呼んでいる。こうした大農場の経営は、広大な土地に育つ牧草に見合った牛を放つという粗放的なもので、管理も他人任せ、肥料を使わず、もっぱら育つに任せている。

パンパの広さを体感するため、扇の要にあたるブエノスアイレスからアンデス山脈裾野の町、メンドーサまでバスで横断することにした。ブエノスアイレスを 15:00 時に発ち、山麓で交通の要地メンドーサ着が翌日の 7:00 時だった。途中、夕食と休憩で3度停車したが、夜通し走った。夕食までは、行けども見渡す限りの緑の平原で、小麦、トウモロコシ、大豆、ヒマワリ、牧草のアルファルファなどの畑地と所々に風車が立ち牧牛、牧羊地が続いた。その規模を目の当たりした時、日本の集約的農業とは根本的に異なる粗放農業であることを実感した。

翌朝、メンドーサに近づくにつれてようやく大地の凸部が見えてきた。只々平べったい大地では、目印になるものが無く移動距離は実感できない。過ぎ去った時間だけが広さを表していた。山国育ちのものには、何とも落ち着かず、不安に駆られるところだった。

<ガウチョ>

パンパを舞台に活躍してきたガウチョは、アメリカのカウボーイと同様に理解されている節もあるが、アルゼンチンでは職業としての牧人はバケーロまたはベオンと呼び、ガウチョとは厳密に区別している。

今日のアルゼンチンでは、「あいつはガウチョさ」の言葉には、「いいやつだ」といったように、何かに長けており、敬意を込めて使用する言葉だと聞いた。そもそもガウチョのはじまりは、農業移民としてペルー方面からきたスペイン人ともいわれている。先住民族とのいざこざから定住よりも、16 世紀に持ち込まれて増え続け、1,500 万から 2,000 万頭も生息していたとされる野生の牛を追って生計を立てていた人々の ことである。開拓魂をもち、自然環境への強い順応力を持ち合わせ、先住民族との共存に長け、馬術に優れ、自由気ままに移動できる広大なパンパを生活の場としていた。



ガウチョ会館の絵画

今でこそパンパは世界的な穀倉地帯だが、19 世紀前半まではガウチョの天下だった。19 世紀後半、冷凍船の開発で食肉がヨーロッパへ輸出可能になると、ヨーロッパから多くの移民を受け入れ、これまで所有者不明の土地に、地主が有刺鉄線を張り巡らして支配しはじめた。加えて、ヨーロッパの農業、文化を目指した政策は、ガウチョが生活の場を失うことに拍車をかける結果となった。

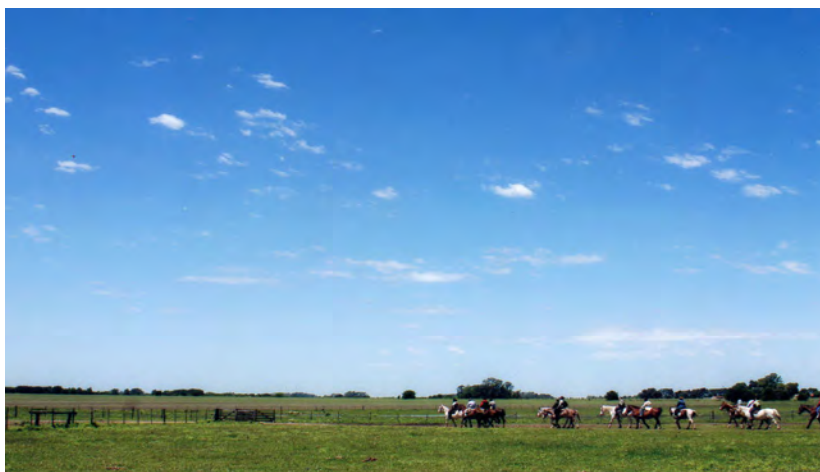
しかし、ガウチョはアルゼンチン、ウルグアイの基幹産業である牧畜のパイオニアであり、一時期の牧畜を支えてきた血と誇りは、アサード、焼き肉やパリジャータ、牛肉と臓物の炭火焼盛合わせ料理に、出身地特有の文様のポンチョ、肉食の栄養補給マテ茶、ガウチョの歌やダンスへの憧憬などなどとして現代社会に脈脈と受け継がれ、日本社会の侍、時代劇と一脈通じるものを感じた。

＜ガウチョ ショー＞

ガウチョショーのツアーバスがブエノスアイレスを出発して間もなく高層建築が消え、1 時間もしないうちに大自然へと変わった。エスタンシェアとはアルゼンチンの大地主が経営する農場または牧場のことで、目的地のサンタ・スナ牧場もその 1 つでる。

ブエノスアイレスから 80 km で、白い雲が浮く大きな青い空の下に広がると見渡す限りの牧場であった。ここはアルゼンチン、ウルグアイ、パラグアイそしてブラジル南部に広がる草原地帯、パンパの一角である。

大通りから牧場に入ると、大きなユーカリの大きな木が生い茂っていた。バスを降りて歩くこと数十m、かつてガウチョ達の社交場でもあった酒場兼雑貨屋、ボリーチェを真似た建物があり、



ワインとエンパナーダ、中に挽肉などが入って大きな餃子のような形をした揚げパン、の歓迎が待っていた。その背後は馬小屋で、外で裸馬に鞍をつけているのが見える。

先客は、西部劇に出てくる様な馬車に乗って、軽快に走りながらそよ風を受け、揺られていた。後ろには、人を乗せた 15、6 頭の馬が、先頭のガウチョ、正確にはバケーロに従って次々柵の外に出て行く。360 度見渡す限りの平原の空は大きく広い。土地に多少の起伏はあるものの丘や山らしきものは見えず、目眩をするような感じだ。

カザフスタン以来の久しぶりの乗馬だった。視点が高くなった分だけ視野が広がり、空が一層大きくなった。馬上でカメラを構えると、体が予想以上に左右に揺れて不安定だった。牧場の内の周遊コースを一回りして馬を降りた時、馬に話しかける母子の姿があった。母親が子どもを目線まで馬の手綱を引いていたが、子どもは怖がる様子もない。手綱を放したとき、馬が小さな子どもとまるで会話を楽しんでいるように見え、馬の目は体に似合わず優しくかった。

ガウチョショーで馬を操るガウチョ達は、見るからに自然体で格好良かった。一見派手に見える出で立ちもぴたりと決まり、何よりも生きいきとしていた。最も目に付くのが腰に巻きつけたベルトだ。革のベルト、ファハにはびっしりと銀貨が縫い付けられていた。かつて全財産を携行していた頃の名残だと聞く。若者の腰には、綺麗に刺繍された布製のベルトが巻かれ、これもまた目を引く。ファハの後部にはファコンと呼ばれるナイフがあった。この牧場では一種の飾りだろうが、無いと格好つかないのだろう。頭にはフェルト製のつばの広い帽子が主流だったが、若者というか若造はハンチングとベレー帽の中間のような独特のものをかぶっていた。そして、首元には各自の好みか色とりどりスカーフで、中央できりりと絞っていた。



＜サッカー＞

アルゼンチンでスポーツと言えばサッカーである。街角のちょっとした広場はサッカーに興じる子どもたちの舞台である。サッカークラブへの忠誠を宣言している人の割合が、人口の 90% を越すというから、文字通りの国民的スポーツといえる。

アルゼンチンはサッカー常連強豪国で、サッカーワールドカップで 3 回、オリンピックで 2 回優勝している。代表するプレイヤーと言えば、「神の子」の愛称を持つ小柄ですんぐり型のマラドーナである。左足を駆使した足技とセンスでフィールドを駆け回って生まれた伝説の「5 人抜きドリブル」や「神の手」は、1986 年、メキシコワールドカップが舞台だった。世界中の人々がテレビで見ているし、永遠に語り継がれる出来事だった。彼は次のような言葉を残している。「あの 5 人抜きは相手のイングランドの選手がフェアだったからこそやれた」また、「オレが手で決めたように見えたのなら、それは神の手だったかもしれない」。

街角で見かける人物の像やパネルの大半はディエゴ・マラドーナであり、アルゼンチンナショナルチームのユニフォームを着ている人の背番号は、申し合わせたように 10 番だ。マラドーナから直接後継者として指名されたリオネル・メッシは、「背番号 10 は、僕が以前よりも大

きな責任を負う立場になったことを意味している」とその重みを述べている。



アルゼンチンサッカーの聖地 ボカ ジュニアース スタジアム 右上にピッチと観客席を仕切るアクリル板

マラドーナが生涯愛した南米の名門サッカークラブは、ブエノスアイレス南部の港町ボカ地区、イタリア系移民によってつくられ、労働者階級に人気があるボカ ジュニアである。本拠地がボンボネーラ、お菓子箱の意味である。スタジアム中に入るといきなり歴代選手一覧があり、一部は博物館になっていた。2000 年に大々的に改築され、以前のクラブ会長名になったが、人々はこれまでのラ ボンボネーラの愛称で呼んでいた。



歴代選手一覧とトロフィー

ピッチと観客席の間は、越えることのできない、そして壊れることのない高さ5～6m、厚さ10cmほどのアクリル板で仕切られていた。常軌を逸する熱狂的な観客対策なのだろうが、ラテンアメリカの格言の一つに「サッカースタジアム近くに住むな！」があることを知った。

2020/11、マラドーナが亡くなった。アルゼンチンの永遠のライバル国であるブラジルを代表するプレイヤーだったジーコこと、アルトゥール アントゥネス コインブラが「神ですらも不可能だと思うようなことを、マラドーナ氏がやってのけるのを目にした」と述べている。また、大統領命で3日間、全国で喪に服した。

<旅人>

ブエノスアイレスでの夕食後、お茶でもと思ったとき、ホテルのテラスから日本語で「今晚は！」の挨拶が聞こえてきた。同じ年恰好の日本人の独り旅だった。南米も何処に行っても日本人の独り旅に出会うが、還暦過ぎとなると極端に少なくなる。現役で働いていた時からブエノスアイレスを訪れるのを夢見つづけ、退職後、3年間スペイン語を学び、憧れの旅に出てき

たという。スペイン語を話せないままスペイン語圏の旅している自分に比べると頭が下がる想いだった。数年前、奥さんをガンで亡くされたが、現役の頃2年間イギリスで造船関係の仕事をされたこともあり、娘さんはロンドンに留学中だという。若者と違い寛げる一時だった。

南米でも多くの日本人旅人と会した。でも、24 日間の休暇が取れたのでという 40 歳代の旅人以外は、全員仕事を辞めてきていた。ブエノスアイレスとウスワイアの日本人宿、上野山荘で居合わせた日本人はみんな若く、一癖二癖ありそうな面構えだが、自分から苦勞を背負い、頑張りのきく若者たちだった。彼らが仕事を中断することなく、欧米並みに長期休暇で旅に出られる「旅文化」は、いつになったら日本に育つのだろうか。

＜イグアスの滝＞

ブラジル、サンパウロの南、海岸線に沿ってマール山脈が横たわっている。年間降水量が 1,000～2,000 mm の多雨地帯である。ここの水を集めて西に流れるイグアス川の川底が、ブラジルとアルゼンチンの国境をなしているところで三日月形に陥没した。この崖に沿って大小さ



ブエノスアイレスからイグアスへの飛行機から

まざまな滝が 300 近く並んでいるのがイグアスの滝である。イグアスとは、先住民族のグアラニー語で大量の水、凄い水を意味し、毎秒 65,000 t が落下する地上最大級の滝である。この地を訪れたアメリカ大統領夫人に、「可哀想なわがナイアガラ滝よ！」と言わしめたとか。なお、大西洋多雨林が雨季にあた

る 11 月から 3 月にかけて最も素晴らしい眺めになり、1 日で落下する水量は、ロンドンで使用する 1 年分の水に相当するという。

ブエノスアイレス発着の 2 泊 3 日のツアーに参加した。12:55 に離陸した飛行機がイグアスの滝上空で旋回する粋なサービスをしてくれた。左の窓側からイグアスの全貌をカメラに収めることが出来た。陥没の最前線部が少し広がり、一際高く水煙が昇っている。そこに向かって川面に狭い橋が伸びているのが見える。日本の滝のように山峡を流れてきた河川が、そのまま一本の滝となって落ちるのではない。広大な川面の中央部で、川底がすくとんと抜けたように落込んでいる。陥没の縁の長さが、4 km と 5 km ともいわれているが、ここに四方八方から滝が懸かっているのである。機上からは、その規模を実感として捉えることは出来ないし、アルゼンチンとブラジルの国境など解かるはずもなかった。

イグアスの滝の 80% を占めているアルゼンチン側から滝見物が始まった。ビジターセンター前でバスを降り、多雨林の中を 15 分ほど歩いて軽便鉄道に乗った。軌道に沿って細長く空が見えるが、他は鬱蒼として天日を遮っていた。鉄道に沿って、熱帯特有の赤土、ラテライトのぬかるみの道路も通っていた。鉄道終点から樹林帯の中に遊歩道が続いていた。アライグマ

が出てきた。瑠璃色の鳥が見える。



「悪魔の喉笛」(中央部の黒い岩) アルゼンチン側

飛沫の中の小さな黒点がアマツバメ

いつの間にか、橋桁の下を水が流れていた。そして、何処からともなく地響きに似た音が響いてきた。木々の茂みが薄れ、橋は川面に出てきた。目の前には、水煙が立ちはじめていた。直ぐに、地面が揺れるような錯覚に襲われた。人間の驚嘆の声も大きくなってきた。橋の先端が展望台になっており、カメラを構えた人で埋まっていた。

最前列から見る滝は、積乱雲のできる過程を早送りで見ているように、茶褐色の水がむくむくと湧き上がり、落ちていた。気持ちを落ち着かせても、足元からは低く重い音が伝わり、上からは空気を揺さぶる大音響が襲いかかる。目の前で一旦盛あがった濁流は、落下する時は白い飛沫の塊となって水煙の底へとなだれ込んでいく。一瞬吸い込まれそうになる。風向きによって飛沫が降りかかってくる。驚きを通り越して恐ろしい。この恐怖感が「悪魔の喉笛」の語源だろうか。

良く見ると、滝壺を隠す水煙の中に小さな黒点が見える。動いている。羽ばたいている。そして、一瞬にして視界から消える。滝の裏に巣をつくるアマツバメの群れであった。あの小さな鳥が、落下する水の圧力をどのように耐えて裏側に入り込めるのだろうか。

帰りの足取りは行きに比べてゆっくりだった。そして、樹林帯に入ってやっと我に返った。一旦、鉄道の乗車駅まで戻り、带状をなしている大小様々な滝の上下に伸びた遊歩道を前にした。地図を見ても滝の間を縫うように張り巡らされたコースは、複雑過ぎてのみ込めない。ツアーリーダーが言っていた、先に上のコース、後で下のコースを歩いてバス乗車地点に向かうのを確認して歩き出した。

イグアスの滝は、見えなくなっても現れるのではなく、何処を見ても滝、滝であった。しかも、带状の連なりが2段、3段と階段状に落下しているのだから至る所から滝の音が響き合い、水煙が視界を遮り、水飛沫が飛び散っている。

<イグアスの滝ポートツアー>

ポート乗場に集まっている殆どの方は素足、水着、ビキニ姿で濡れる気満々である。履物をザックに仕舞い込み、ゴアテックスの雨具を着込んだ。カメラはレンズ分だけ穴をあけたビニールの袋に入れた。

20 人乗りボートは、イグアス川の急流に向かってスピードをあげた。川面から滝へ接近する迫力は、地上から見る比ではなかった。船首がぐうんと持ち上がる。波打つ茶褐色の濁流にさしかかると、波がバンバンと音をたてて船底を打つ。その都度ボートは大きくアップダウンし、水飛沫が襲ってきた。しかし、これは序の口の前触れに過ぎなかった。滝が近づくとボートは一旦停止した。カメラタイムだ。体制を整え今度は滝へ突入した。滝のほんの端っこに入ったに過ぎないが、落下する水の圧力に、反射的に頭を下げ、目を閉じた。思い直して目を開くも白い水の壁だけで、他は何も見えない。ばたばたと降りかかる水柱から開放されると、水着の人々から何やら大きな声があがり、それを合図にまた水壁へ突入した。しばらくの盲目状態から、ボートが後ろに下がると水煙の中に滝が霞んで見えてくる。久しぶりの童心に帰り、水遊びを楽しんだ。乗船地よりも下流までボートで降り、そのまま多雨林内の野生動物ツアーでアルゼンチン側の観光を終えた。



＜ブラジル側のイグアスの滝＞ — ブラジル

翌日、ブラジル側観光である。8:15、マイクロバスで早々に宿をでた。イグアス川を渡りブラジルに入る。ビジターセンターで専用の二階建てシャトルバスに乗り換えた。終点 1 つ手前で下車し遊歩道に入ったが、アルゼンチン側に比べると単純で気が楽だった。所々にビューポイントがあり、滝の白と茶褐色の川面との間に虹が懸かり、草木の緑に映えていた。景色に見惚れていると自ずと歩みも遅くなるが、全長 1.2 km が短く感じられた。



ブラジル側からの「悪魔の喉笛」

アルゼンチン側ほど滝は多くない。そのかわり一つ一つの滝が大きい。フィナーレは川に突き出た展望台だった。イグアスの滝が深く U 字形になっており、水が半円状に集まり落下する「悪魔の喉笛」

を見上げる位置にあった。水煙で全貌は見えないが、水のカーテンが雪崩れ込む水の音は共鳴しあっていた。驚きが恐れに変わる。そして、畏怖の念が飛沫とともに襲いかかってきた。まるで水中散歩状態だ。水着姿の子どもは滝の風圧で唇を青くして、体を震わせていた。

＜マテ茶＞

マテ茶は、南米原産のイエルバ マテの葉や小枝を乾燥させた茶葉に湯または水を注ぎ、成分

を浸出した飲み物である。牛肉を主食のように食べるアルゼンチン、パラグアイ、ウルグアイやブラジルなどでは、「肉を食べる時に菜っ葉類を食べては、肉本来の美味さが解らない」と、アメリカのように洗面器のような器にサラダが出てくることはなかった。その代わり「飲むサラダ」の別名をもつマテ茶を四六時中飲んでいる。茶やコーヒーといった単なる嗜好品という



よりビタミンとミネラルの含有量が極めて高く栄養摂取源の一つの感じてあった。

飲み方は、ひょうたんやガラスコップも見られるが、各自がかなり凝ったマテ壺に茶葉を入れ、湯または水を注ぎ、ボンビージャと呼ばれる茶漉しを兼ねたストローで飲んでいた。日本茶に緑茶と焙じ茶がるように緑マテ茶とローストマテ茶があり、水出し場合は緑マテ茶が多く、

青臭みと強い苦味があった。ローストした方は香ばしい風味が出る。

2012 年に「太陽のマテ茶」の宣伝文句で売り出された。香料のようなものが気になったが、今はほとんど見かけなくなった。

参考までに、1 人当り年間牛肉消費量（2016/10）を見ると、

- | | | |
|----------|---------|------------------|
| ① ウルグアイ | 61.0 kg | 200g のステーキ 305 枚 |
| ② アルゼンチン | 53.5 kg | 268 枚 |
| ③ ブラジル | 38.4 kg | 192 枚 |
| ④ アメリカ | 37.9 kg | 190 枚 |
| ⑤ パラグアイ | 35.6 kg | 178 枚 |

以下オーストラリア、カナダ、ニュージーランドと続く。日本は 21 番

目で 9.6 kg 10 枚。南米の国々が上位を占めている。料理法は直火で肉を焼き、味付けは塩だけのシンプルな料理が一般的だった。



ボンビージャ

＜パタゴニアの入口＞

サンチャゴを出発して 4 日目、国境を越えアルゼンチンのサン カルロス デ バリローチェ通称バリローチェに入った。夏はキャンプやハイキング、冬はスキーと年間を通して多くの観光客を集めるアルゼンチンの代表的な観光地だという。ヨーロッパスタイルの洒落た木造の建物が目立つ街で、ナウエル ウアピ湖の畔にひっそりと横たわっていた。

「サンチャゴ発、ウスワイア解散」パタゴニア縦断ツアーの特徴の一つは自由行動が多いことである。ここバリローチェでもホテルに着くなり印刷物の配布があった。郵便局、両替所、ランドリー、スーパーマーケットやレストランなどなど、滞在中最低限度必要なところの住所とその略地図である。時には街の中央まで案内するが、この場合もそこで解散である。大通りに面した多くの店で、これでもかと言わんばかりにチョコレートと並べていた。大型の専門店もあり、甘く香ばしい香りが街中に漂っていた。

翌朝早く湖岸に出てみた。遠くに雪に飾られた尖峰が並び、湖水はあくまでも青く澄み、空

気は冷え、木々の爽やかな香りに満ちていた。このスケールの大きな景観に加え、人手の入らない湖は北欧の風景を連想させた。これに加えて住民の出身地、スイスやドイツを照らし合わせて南米、あるいはアルゼンチンのスイスに例えていた。ところで、「〇×の何々」の例は、日本では良く見かける。考えてみると、本家本元を決して越えることのできない例えである。

観光案内所前からバスとケーブルカーを乗り継ぎセロオット、オットーの丘に向かった。眼下のナウエル・ウアピ湖に浮かぶヴィクトリア島があった。遠望する限りでは何の変哲もないが、アルゼンチンの人々が鼻を高くするアラジャンの森があると聞いた。ウォルト ディズニーがバンビの森のインスピレーションを得たというサルスベリに似たすべすべした赤い幹の樹木であるという。しかし、対岸の氷雪のトルナドール山群から湖面を渡ってくる寒風は身を切るように冷たく、時折バランスを失うほどの強さだった。

展望台にあるレストランで冷えた体をホットチョコレートで温めた。テーブル上の砂糖袋は氷山とペンギンの絵と大きくパタゴニアと印刷されていた。ここは南緯 40 度、風の大地パタゴニアの入口だった。

【資料】2006 年 10 月末から 12 月初旬にかけて、個人でイースター島を旅した後、ツーカン主催のサンチャゴ発、ウシュワイア解散のパタゴニア縦断の多国籍ツアーに参加した。専用バスによる全行程 20 泊 21 日の旅である。参加者 29 名、国籍はオーストラリア、ニュージーランド、スコットランド、UK、スイス、ノルウェー、日本で、ツアーリーダーとドライバーはオーストラリア人であった

＜パタゴニア＞

子どもの頃に夢見たアフリカと同じように、山岳部に籍を置いた高校の頃から心に入り込んできたのが、果てしなく遠い存在ながらもヒマラヤ、チベットでありパタゴニアであった。

退職後、初めて南米、ペルーを旅したとき、「1 年といわず 1 日でも早く来るべきところだった」というのが素直な気持ちだった。そしてエクアドル、ボリビアと旅しているうちに、パタゴニアが次第に近づいてきた。「パタゴニア探検記」（高木正孝著）、「THE NEXT HORIZON」（地の果ての山々）（クリス・ボ・ニト著）、「嵐の大地」（エリック・シフト著）や「パタゴニア」（椎名 誠著）などから受けた影響も大いに働いていた。強風、氷河と天を突く岩峰、果てしない荒野、そして野生動物のイメージが大きな呼び声になっていた。

バリローチェからプエリト モレノ経由エル チャルテンまで、パタゴニアの荒野をただひたすら南を目指す旅が始まった。1,150 km のロングドライブだ。道路の大部分は未舗装で、野を越え、丘を越えて行く。大きく波打つ大地の端まで 1：30 ほど、また同じく



大きくうねる大地が続く。忘れた頃に車とすれ違う。土埃が煙幕のように舞い上がる。雨でも降らない限り何日でも空中で舞い続けるのどと思いたくなる量だ。

樹木はなく、少しの灌木と地に這いつくばる雑草のみの、無表情に近い荒地の真っ只中でバスが突然止まった。道路脇の裸地に直径 60 cm 位、膝下位の灌木が 3 つ、4 つあり、一面に深紅の小さな花を付けていた。無表情に見える乾燥地も生きていた。そして、花を付けた灌木の周りに散らばる砂利が美しく光っていた。風に飛ばされた砂によって磨かれたのだろう。

パタゴニアの背骨、アンデス山脈の年間降水量は 4,000 mm とも 5,000 mm ともいわれている。このとんでもない雨量が広大な氷床をつくり、多くの氷河を四方に押し出している。西側は悠久の時を経て太平洋に落込むフィヨルドを刻み、東側は豊かな水となって南極ブナなどの森林を育ててきた。その先が乾燥した平坦で広大なパンパだ。雨を降らせ終わった偏西風が氷床と氷河で冷やされ重い風となって吹き続ける。この寒風に吹きさらされ、荒れ果てたパンパの大地がパタゴニアだ。しかし、荒涼とした風情は人々の心を捉えて離さない不思議な魅力をも秘めていた。

パタゴニアの特徴ある山々と氷河は、チリとアルゼンチンに跨っている。ここではパタゴニアの大半を占めるアルゼンチンにまとめている。

<エル チャルテン>

エル チャルテンの入口にビジターセンターがあり、一通りの講義を受けてからホテルに入った。西部開拓時代を彷彿させるところで、1 本のメインストリートが 300m ほど伸びていた。交通信号なし、舗装道路なし、道路片側に数件の小さなレストランとお土産物屋が並び、反対側が草原の広場で、ブランコなどの遊戯具があった。そしてホテルは集落を取り囲むように郊外に散在していた。

レストラン前に、店内に持込めないほどの大きなザックがごろごろとある。行き交う人々の多くは、髭面でこざっぱりとした身なりとは程遠い。飛び交う言葉もまちまちである。パタゴニアを代表する山、氷河から突き出た岩峰フィッツロイ (3,405m) とトーレ (3,102m) を目当てに来た人々だ。今日は、垂れ込めた暗雲に隠れて見えない。

明日、午前中の自由時間に賭けることにし、ホテルのロビーでくつろいでいる時だった。物静かなボーイが話しかけてきた。私が、先日見えたカナダ人の生き写しだという。狐につままれた感じだと、分厚い記録帳を開き文末のサインを指差した。何と、今年の 3 月、カナディアン ロッキーを ”Hut to Hut” でスキーと登山を楽しんだ時のキャンプマネジャーで、カナダ在住の日本人だった。

<フィッツロイとトーレ> — チリとアルゼンチン国境

4 時過ぎに目が覚めた。ぴりっとした寒気の中に未明の岩峰がによきによきと立っていた。これこそが求めてきた山々であった。2 つの岩峰は、世界自然遺産に登録されたロスグラッシャレス国立公園のフィッツロイ山群である。11:00 に戻ることを書き残し、5 時に宿を抜け出した。昨日の展望台まで 1:30、息を弾ませ急いだ。目の前に天を突くように並ぶ尖がった岩山、フィッツロイが威圧感に溢れ、荘厳な朝日を浴びていた。静寂を打ち破るのはバシャ、

バシャというシャッターの音と、自分の荒い息遣いだけだった。



マドレ湖とイジャ湖方面に進み始めた時、池塘群に逆さフィッツロイ山群の空の青、氷雪の白、山の茶色い岩肌があった。ぴりっとした早朝のトレックは気持ち良い。次々に現れる湖は野鳥の遊び場であり、草原にはウサギが跳ね回っていた。フィッツロイ川に近づくと、隠れていたトーレ、コルドンアデラの山々が姿を現した。なかでもトーレはヨーロッパアルプスの針峰群と似ていなくてもないが、氷河に削られた鋭く切り立った岩峰で根元から垂直に天にむかって聳えていた。まるで空想の世界に居るような不思議な印象だった。すっきりした気分で、ホテルに戻ったのは 11 時を 10 分ばかり過ぎていた。

＜パイネの角＞ ― チリ

フィッツロイの南 160 km、トーレス デル パイネ国立公園がある。「パイネの角」と呼ばれる奇怪な姿をしたパイネ クエルノスがある。遠望されるところでバスは止まった。薄い霧に霞んで見えだが写真になる眺めではなかった。

チリ政府が保護に取り組んでいる成果だろうか、公園が近づくとグアナコの群れが現れた。アルパカ、リヤマ、ビクーニャと共に南米を代表するラクダ科の動物である。茶褐色で優雅な姿態はサバンナに住むインパラに似ていた。



今日からテント3泊である。食事、シャワー付きに加え、4～5人用テントに2人だから手足を伸ばしても余裕があった。テントサイトはペオエ湖東端で湖面越しのパイネ グランデ、「パイネの角」クエルノスが一幅の絵画であり、マゼランガンのつがい草原で餌をついばむ長閑なロケーションであった。

クエルノはスペイン語で「角」を意味する。パイネ クエルノスは、山の概念とはおよそかけ



離れた奇怪な岩塔で、名称通りの「角」だった。白っぽい岩に赤っぽい岩が乗った一枚岩の壁で、一本のクラック、割れ目も見えない。氷河が削り残した奇岩峰だ。その西に位置する主峰3,050mのパイネ グランデが尾根形の堂々とした風格で、雪煙を巻き上げていた。

<パタゴニアの岩峰> — チリ

公園入口でマイクロバスに乗り換え、5～6 kmほど入ったラストーレスキャンプ場からパイネトーレス、「パイネの塔」を目指して登りはじめた。天候は完全に回復し、雲ひとつなく晴れあがった。パイネ山群北東面の裾を3時間弱、せせらぎに耳を傾け、ひんやりする木立の中を気持ちよく歩いた。チレノ小屋からしばらくは野趣に満ち溢れた自然庭園の感じだったが、次第に水がなくなり、木々が姿を消し、岩塊がごろごろしたモレーンの急坂になった。火照った体に気持ちよかった風は次第に肌に突き刺さるようになってきた。

後退堆石の鞍部に立ったとき、小さなエメラルドグリーンの氷河湖とその上に氷河を従えた奇怪なパイネの塔がそそり立っていた。天然のオベリスクだ。みんな一様に驚嘆の声を発した後はしばらく動かない。我に返ってシャッターを切る。そして、岩陰に身を寄せ寒風を避けざるを得なかった。

資料によると、約1,200万年前に隆起した花崗岩の岩山で、これを覆っていた堆積岩が氷河によって侵食され、硬い花崗岩が塔となって残ったのだという。左からトーレ デアゴスティーニ(2,850m)、トーレ セントラル(2,800m)、トーレ モンツィーノ(2,700m)と並んでいた。キャンプ場から4時間弱のコースだった。



＜パタゴニア氷河＞ ― チリ

パタゴニアのもう一つの顔が氷河である。その規模は、南極大陸、グリーンランドに次ぐ面積で、氷河の国立公園が世界遺産として登録され人気を呼んでいた。手にしたフィッツロイ、パイネの地図にもたくさんの氷河が記されていた。しかし、このあたりの緯度を見るとおよそ南緯 50 度である。これを北半球に当てはめてみると、サハリンの中央部、ハバロフスク、ウランバートル、キエフ、プラハ、ロンドン、シアトル、バンクーバーで、氷河のイメージが湧いてこない。

氷床の発達するパタゴニアはアンデス山脈の南端に近く、最高峰のサン ヴァレンチンでも 4,025m、他は精々 3,000m そこそこである。標高が特別高いということもないから、偏西風による周年降水型による多量の雨こそが氷河を涵養しているといえる。ペリトモレノ氷河、スpegatty氷河、ウプサラ氷河、グレイ氷河などなどが観光上知られ、年間に平均 100m から 200m も移動するといわれている。この速さが、氷河崩落を観察しやすく人気を呼んでいる。

この度はペリトモレノ氷河とグレイ氷河を時間かけて見ることができた。パイネ 3 日目のグレイ氷河は、アップダウンを何度となく繰り返した後、突然遙か彼方に姿を現した。先端部の縦に割れたぎざぎざが見える。氷河から吹き出す風は冷たさを通り越し痛かったが、なだらかな傾斜で雲の彼方まで続く広大さは氷床そのもので、しばらく見惚れてしまった。昨年 11 月の東チベットで見た傾斜 2 度という来古氷河と相通じる眺めだった。足元のグレイ湖には先ほどから崩落した氷塊が漂い数千年ぶりに水に帰ろうとしていた。

グレイ湖小屋からボートに乗り、氷河クルージングを楽しんだ。湖に落ち込む氷河先端部は 50～60m の高さで、縦に割れた氷柱で青白く輝きながら乱雑に立っていた。そして、地鳴りに似た轟音とともに何度となく崩れ落ちていた。氷河の先端部に接近するにつれて、



湖面は氷塊で埋まってきた。長さ 40～50mの大きな塊は見るからに硬そうな蒼氷であった。

クルーが湖面から氷塊をすくい上げ、オンザロックをつくってくれた。グラスの中の氷からぱちぱちと音をたて数千年前の空気が出てきた。体質的に一気に飲み干すことはできないが、太古を飲み込む時はハイな気分になった。

帰り際、一瞬陽光が射した。氷河も、氷塊もそして回りの氷雪の山々も一日の美しさを凝縮して見せてくれた。氷河の雄大な眺めと感覚的に捉えることもできない長大な時間の流れのなかに身を浸しながら帰路についた。

<リオ グランデからウスワイア>

海岸をしばらく走っていると、純白のモルタル塗りの広場が見えた。物々しい武器と、野外絵画展示場のように数枚の地図があり、その上に大きなアルゼンチン国旗がちぎれんばかりにはためいていた。バスは止まることなく過ぎ去ったが、後で足を運ぶべきところと決めた。大英帝国の名残で未解決のフォークランド諸島を巡るアルゼンチンとイギリスの意地の張り合いが戦争へと発展した「フォークランド戦争」のモニュメントだった。冷戦の最中、西側陣営同士の戦争で、歴史的認識の違いが殺戮の場となった例とも言える。フォークランド諸島を竹島なり、尖閣諸島に置き換えてみると背筋が寒くなる。



リオ グランデは高台に発達した町で、海は見えなかった。地の果てウスワイアにむかう途中唯一の町らしい町で、ひなびた土地柄にもかかわらず物価は安く、スーパーマーケットには商品が溢れていた。人口の少ないフェゴ島に少しでも多くの人を入れるため政府が自由貿易地帯としているためである。

翌日、3 時間ほどのドライブで「地の果て」ウスワイアを見下ろす丘にさしかかった。寒々としてひっそりと静まり返った街だ。淀んだようなビーグル海峡に面した港には、南極に向う大きな客船が煙をゆったりと吐きながら停泊していた。アンデス山脈が海に没するところながらも、街の背後に衝立のように氷雪で見繕いをした険しい 1,300～1,500mの峰々がそそり立っていた。ウスワイアは重苦しい色をした海と険しい山の間に横たわる坂の街だった。

<地の果ての日本人宿>

サンチャゴからウスワイアまでのツアー終了後、日本人宿、上野山荘にお世話になった。パ

タゴニアは大陸の南端までで、その先は多くの島々からなる。最も大きいのがフェゴ島で、先端に最果ての町ウスワイアがある。



フェゴ島は、木々の枝はねじくれ、大地にしがみつくように根を張っていた。木々は風と寒さに耐え凌いだものだけで、天然の風向計の役目を果たしていた。

上野山荘はウスワイアの街外れである。南米大陸南端、ウスワイアを目指す旅人がたどりつくオアシスである。小高い丘の上にあることから「上野山荘」と呼ばれている。アルゼンチンに移住した上野氏が、海釣り、川釣りと釣り変遷の後に落ち着いたのが湖釣りのウスワイアだったという。ウスワイアが地の果てとして知られるようになった頃、高級なホテルだけで寝床に困った日本人旅行者が警察に紹介されたのが上野氏宅だった。その後、口コミで評判が広がり自宅を改造したが対処してきたがきれなくなり、現在のところに新築したのだという。

上野山荘の居間に一人の若者の写真が飾られている。日焼けした顔と澄んだ目、伸びた髪と髭、まだあどけなさが残る酒田市、旧平田町の池田拓君（当時 24 歳）である。南米大陸の北から南端の上野山荘を目指してリヤカーを引いて歩き続き、20 カ月かけてたどり着いた。帰国後、自然保護の基礎を学ぶための資金稼ぎで建築労働に従事したが、不慮の労働災害で亡くなった。家族が保険金を上野氏に寄付、それを基に建てられたのが今の上野山荘である。

宿のオーナーは綾子おばあさんで、82 歳（2006 年）と高齢だった。自炊の宿とはいっても、経営するとなると大変な仕事である。旦那さんが亡くなったとき辞めようとしたが、客がひっきりなしに来られるので辞められなかったという。

ゴミの出し方、トイレ掃除、イヌの散歩コースなど誰でも出来るように説明書きがあった。

また、ロビーの腰板に大きな貼り紙には、おばあさんに何かあったときの連絡先は、娘さんと孫娘さんの居住するブエノスアイレスだった。

2006 年の時、南極大陸行き船舶のキャンセル切符を探したが手に入らず南極行きを断念した。綾子おばあさんが何の躊躇いもなく「来年、またいらっしゃい！」の言葉をかけてくれた。上野山荘を後にする時、居合わせた日本人がみんなで見送ってくれたが、イヌのトゥルーチャは家の中だった。別れの時は何時も出てこないのだという。



【追記】2010 年 4 月 綾子おばあさん没 87 歳。上野山荘は 2014 年 3 月で閉館と聞いた

<ウスワイア>

ウスワイアとは先住民族、ヤマナ族の「西に入り込んだ湾」の意味だという。「世界の果て博物館」、「世界の果て元監獄」、観光列車は「世界の果て号」と「世界の果て」を売りにしている。アルゼンチンの首府、ブエノスアイレスより南極大陸の方が近い世界最南端の街である。しかし、観光客で賑わうウスワイアは「最果て」のイメージとはかけ離れた賑やかさだ。街全体が免税地区で、空港内の免税店を大きくした派手な店舗が軒を連ねていた。



昨年（2006 年）、上野山荘を後にする時、綾子おばあさんからかけられた「来年、またいらっしゃい！」の言葉がすっと心に入り込み、ウスワイア再訪イコール南極クルージングが既定の事実となっていた。

2007/11、ウスワイ入りした日に雪が降った。真夏の雪である。南極ブナの葉は青々としており何とも妙な感じだった。上野山荘の玄関で大きな声を出した途端、トゥルーチャが飛び出してきた。昨年、宿泊者のみんなに見送られて山荘を後にする時、家の中で悲しげな声を出していたイヌである。

最果ての地を目指す旅人は少なくないが、ここで旅を終える人はいない。ここは旅の終点でもなければ、最終目的地でもない。旅の途中に立寄り元気をもらい、そして



ウスワイアの記念品

また旅立つ新たな出発地である。気が向けば街にでて英気を養い、食べたいものを買って来ては自分で料理する。そして、機が熟すればみんな旅立って行くところだ。南極クルーズ船発着する港に面した海岸公園道路の法面に青ペンキで書かれた“USHUAIA end of the world beginning of everything” が全てを言い表していた。

余談だが、ユーラシア大陸最西端に位置するロカ岬。ここには、ポルトガルの偉大な詩人カモンイスが詠んだ『ここに地終わり、海始まる』という一節が刻まれた塔が建っている。海洋国家ポルトガルに相応しく、海の無限の可能性を暗示している。ポルトガルは陸の国境は大国スペインに囲まれており、陸路での活路を見出すのは不可能である。海に乗り出すより術がなかったのである。アフリカ大陸南端の喜望峯は、初めは「嵐の岬」であったが、インド航路発見の希望から「喜望岬」（CAPE OF GOOD HOPE）と名を変えた。結果としてこれがバスコダ ガマのインド航路発見へと繋がっていく。

ブラジル（ブラジル連邦共和国）

南米の大国ブラジルは、南アメリカ大陸のおよそ半分の 47%を占め面積、人口とも世界で 5 番目の大国である。東側は大西洋に面し、チリとエクアドルを除く南アメリカの全ての国と国境を接している。北部をアマゾン川が東に流れ、上中流域に広大な低地、アマゾン盆地が広がる。

1500 年、この地を訪れたポルトガルの商人が、赤色の染料として用いていたインド原産のものと同じ樹木が自生しているのを発見した。赤々と燃える色彩の染料が取れる木という意味でパウブラジル、即ち「赤い木」と呼ばれるようになる。これが後に樹木が採れる土地そのものをブラジルと呼ぶようになったと考えられている。

<世界のアマゾン川>

この国の北部を流れるアマゾン川は、アンデス山脈の雪解け水から始まり、1,100 を越える支流を合せ、東に 6,000 数百km流れて赤道で大西洋に注ぐ。アフリカ東部を流れるナイル川と世界最長を競っているが、ギネスも決めかねている大河である。流域の大半はブラジル国内であるが、北東から南東に取り囲む 10 カ国（フランス領ギアナを含む）に及んでおり、その面積はオーストラリア大陸に匹敵する。

河口の幅は 320 km以上と言われているが、水の流れている所と流れていない中州が入り混じっており、何処からどこまでを河口と考えるかにより大きく異なってくるという。水深は 50 ~60m 場所によっては 120m にも達する。そのため外洋船が河口から 1,600 km上流のマナウス^(*)まで航行でき、大型船でも 3,500 km、海拔 100mのペルー領イキトス^(*)まで遡れる。長さだけでなく、流域面積も川幅も何もかも世界一の大河である。

流域を覆う熱帯雨林のセルバには、他に類を見ないほど多種多様な植物が生い茂り、動物が生息している。哺乳類が約 250 種、鳥類 1800 種、魚類は 2500~3000 種、昆虫にいたっては 100 万種を超え、今も新種が見つかっていると聞く。

近年、日本の店頭で見かけるアサイーはアマゾン原産で、ポリフェノールがココアの 4.5 倍など栄養価に富み「アマゾンのスーパーフルーツ」と呼ばれているし、レモンの何十倍ものビタミン C を含む果実、カムカムもまたアマゾンで発見された。同時に、アマゾンは別名「天然の薬草の宝庫」である。天然の抗がん物質として、細胞の自滅誘発を高め、がん転移を予防し、正常な細胞は傷つけないという驚くべき効果を持つタヒボ、学名タベブイア アベラネダエが臨床医学の現場で話題になっていると聞いた。世界で使われている薬草の 70%以上がアマゾンで見つкаっているというから、近代医学への貢献は計り知れない。



アマゾン川沿岸の薬局店

アマゾン川流域における資源の重要性は、地球規模の問題として認識されている。それは地球上に残っている熱帯雨林の半分を占め、酸素供給源として、更には世界真水の 1/4 を保っているからである。今後の食料、工業、医療科学の新たな原料となる可能性を秘め、抗がん作用のある熱帯植物も多く眠っているともいわれている。しかし、こうした植物の可能性を殆ど引き出すこともなく、今、乱開発による熱帯林の破壊が急速に進んでいる。

(*1) マナオス ブラジル北部でアマゾン川支流ネグロ川東岸に位置する河港都市。外洋船が入港可能で、国際空港が建設され自由貿易港として海外企業を受け入れている商工業都市

(*2) イキトス アマゾン川河口から大型船が廻れる。「陸路で行けない世界最大の都市」

＜セルバでの一夜＞

クスコから飛行機でアマゾンの入口、プエルトマルドナードに入った。ここはアマゾン川流域だがペルー領である。ペルーというと高地のイメージを持つが、首都のリマのある海岸沙漠地帯、アンデスの高山地帯、そしてアマゾンの熱帯雨林、セルバの三地域に分類できる。ペルー領であるがアマゾン流域のセルバということから、次の＜ピラニア釣り＞と共にブラジルで取り上げることにした。

村の栈橋からセルバの中のキャンプ地までボートで降った。2時間下って標高差が 5mそこそこだった。寝泊まりはコテージで、蚊帳の破けたところは絆創膏で補修した。夜のボートサファリのときだった。岸边に一对の真っ赤に燃える石炭のような目が光っては消え、光っては消えた。ボートの進みに様々な鳥、サルの騒々しい鳴き声がついて来た。そして、夜のセルバは漆黒の壁と化した。翌朝、太陽に温められたセルバからは煙のように水蒸気が立ち昇り、大きく息づき始めるのを目の当たりにした。

キャンプ地の行き帰り、岸边の所々で高床式の住居を見かけた。セルバでの交通手段は船だけである。家を放棄すると 1 年以内に跡形もなくアマゾンに飲み込まれてしまうという。このような多様な生物の揺り籠のようなアマゾンを、チャールズ ダーウィンは、「偉大な、野生の、乱雑ではあるが豊かな温室」と呼んだ。

＜ピラニア釣り＞

アマゾン川というと、肉食の淡水魚ピラニアが思い浮かぶ。現地の言葉でピラニアとは歯のある魚の総称でかなりの種類に分けられるが、大まかには赤、黒、白色に分類されていた。

普段は川底でじっとしており、警戒心が強く、



セルバから立ち昇る水蒸気



臆病な魚だという。血の匂いに豹変することから、かなり誤解されている魚だが、怖いもの見たさも手伝いピラニア釣りの時は童心に帰った。竿は現地調達、糸と針はガイドが用意してくれた。水の濁った澱みで舟を止め、エサの鶏肉を付けている間、ガイドは水面を棒でバシャバシャと何度も叩いた。音にも反応し川底から動き出すという。2度場所を変えたら、入り食い状態だった。全員が釣りの初心者で、5～6回の当りでゲットできるのは1回位。逃げられては残念ながら、釣り針ごと食いちぎられては付け直し、釣れては大喜びで舟は大賑わいだった。獲物は15～20cmほどの黒っぽいピラニアだった。釣り針を外す時は、獲物を踏みつけ、動きを止めてと慎重を期した。現地では貴重な蛋白源になっており、肉は白身で癖がなく焼いて、煮て食べるという。

＜鶴岡のアマゾン民族館＞

鶴岡にあった「アマゾン民族館」が2014年、財政難の理由から閉鎖された。鶴岡在住の山口ご夫妻が、アマゾン川流域に暮らす30以上の先住民族と生活を共にしながら収集した民俗学的資料が1万点、生物学的資料が約2万点の中から貴重な資料が展示され、見応えがあった。現地で収集された貴重で膨大な資料が展示され、見応えがあった。

「鶴岡に何故アマゾン?!」当時、何度か耳にした言葉である。確かに鶴岡の視点からすればこのような疑問も出てくる。しかし、現代は、物にとどまらず知の面でもグローバル社会である。これは避けられない事実であり、今後は益々進むことは明白である。ならば鶴岡とか日本という枠を外して、世界的な視野に立った時、薬草や医薬さらには生態系などアマゾンの存在が如何に大きいかははっきりと理解できる。鶴岡という1つの地方都市が、東北や日本を飛び越えて世界に発信していたのがアマゾン民族館であったといえる。

民族館の閉館を耳にしたとき、ダーウィンがアマゾン川流域のセルバを称した「偉大な、野生の、乱雑ではあるが豊かな温室」が脳裏を過った。そして、一度失うと決して蘇ることのないセルバに響くチェーンソーとブルドーザーの音が聞こえてくる思いがした。

2019年、収集の一部を東京で展示した時、写真家、デザイナーなど幅広い職業の方々が足を運び、羽飾りの美しさに驚嘆し、仮面や器の造形に驚きの声を上げたという。幸い資料がそのまま鶴岡に残っている。個人所有だが、ある意味では鶴岡市の、日本の世界に誇れる人類の遺産であり、文化財である。これらを介して世界の人々の暮らしと生活文化を考え、新たな博物館のあり方を模索するのも文教都市鶴岡の使命と思うのだが…。

ブラジルの悩み

1956年から60年までの間、ブラジル大統領クビシェッキは「50年の進歩を5年で」をスローガンにして急速な工業化を推し進めた。ブラジル南東部には100%出資の外資企業が誘致され、日本からも製鉄、造船など多くの企業が進出していった。さらに、内陸に新しい首都建設を急ぎ、1960年に新首都ブラジリアを完成させた。

しかし、それに伴い財政赤字はGNPの25%にも達し、国内はインフレ、経済停滞、労働運動や農民運動が激しくなり政情不安に陥ってしまう。その後、1964年クーデターで軍事独裁政権が生まれ、高度な技術を持つ官僚と軍部による工業化を進め、高度経済成長をとげていく。

その結果、ほとんどの工業製品の国内生産を可能にし、輸出の約半分を工業製品で占めるまでになった。

その反面、返済不可能な膨大な累積債務を生み、今日の民政新政権を悩ませている。物価の上昇も急激に進み、1985年に196%であったインフレ率が1990年に1762%に達した。こうしたブラジルの経済悪化は11.2%、約1,200万人の失業者(2021/12~2022/2)を生み、ブラジル日系人の出稼ぎを目的とした来日を増加させることになり、10数万人のブラジルの日系人およびその家族が就労目的で日本に入国している。一方国内での人口10万人当りの犯罪発生率は、殺人は日本の約36倍、傷害は約21倍、強盗に至っては420倍となっている。

【資料】ラテンアメリカの「世界1」

ラテンアメリカ案内書や資料をめくっていると、世界で最も広い流域面積の川、世界で最も海拔高度の高い首都、世界で最も落差の大きい滝、世界で最も美しい山など、「世界1」というものを多く目にする。思いつくままとめてみた。

- 1.世界で最も高いところにある国際空港は？ ヒント：海拔高度 4,082m ボリビア
- 2.世界で最も高いところにある鉱山は？ ヒント：海拔高度 4,650m 銀山として有名 多くは
16世紀~17世紀にかけてヨーロッパに運ばれた ボリビア
- 3.世界で最も高いところにある都市は？ ヒント：人口 140,000人 標高 4,070m ボリビア
- 4.船が航行する世界最高所の湖は？ ヒント：湖面の海拔高度 3,899m 海水湖 ペルーとボリビア
との国境
- 5.世界唯一赤道直下でペンギンが住む諸島は？ ヒント：大陸から 1,000 kmの火山島
- 6.世界で最も高い活火山は？ ヒント：標高 5,896m エクアドル
- 7.世界で最も美しいといわれている山は？ ヒント：ペルーアンデス 標高 5,947m
- 8.世界で最も美しいといわれている湖は？ ヒント：標高 1,560m カラフルな衣装の多くの先住民民族
が湖の周囲に住む グアテマラ
- 9.淡水湖(ニカラガ湖)にある世界で最も大きな島は？ ヒント：面積 276 km² 人口 35,000人 ニカラ
グア
- 10.世界で最も広い流域面積の河川は？ ヒント：流域面積 65,000,000 km² 水量も世界 1
- 11.海のない国家で、世界で唯一海軍をもつ国は？ ヒント：訓練は大きな湖
- 12.世界で最も高所にスキー場のある国は？ ヒント：標高 5,300m 2番目中国(4,300m) 3番目
はインド(4,200m)
- 13.世界で最も海拔高度の高い首都は？ ヒント：3,650m 憲制上の首都は「スクレ」 ボリビア
- 14.世界で最も大きな塩の湖(原)は？ ヒント：面積は 120 km×100 km=12,000 km² 塩の総量は
20億 t
標高 3,760m

15.世界で最も落差の大きい滝は？ ヒント：落差 979m ベネズエラ

16.陸路のない世界最大の都市は？ ヒント：人口 43 万人（2018） 交通手段は船か飛行機のみ
陸の孤島 ペルー

（6 と 12 は、活火山の定義の変更や氷河の消滅で過去のものとなってしまった）

<解答>

1.ラ・パス ル・アルト国際空港 2.ポトシ鉱山 3.ポトシ 4.チカ湖 5.ガラパゴス諸島 6.コトパク山 7.アルパマヨ山
8.ティティカカ湖 9.オマヘ島 10.アマゾン川 11.ボリビア（パラグアイは水軍） 12.ボリビア（チャカルタヤスキー場）
13.ラ・パス 14.ウニ塩湖 15.インゲル滝 16.イトス